

戦国期における燕の墓葬について

石川 岳彦

I はじめに

燕は、西周期から戦国期にかけて現在の河北省附近を中心にして存在した国である。文献によれば、燕は西周期に周王室の一族がこの地に封ぜられて建国した国であるとされる。そしてその後、戦国期に至っていわゆる「戦国の七雄」の一つとして知られる。

1996年に正式報告された燕下都は、これまで燕の戦国期の都城址と考えられていた遺跡である（河北省文物研究所 1996）。この遺跡では、宮殿跡のほか、城壁、工房遺跡などを中心に、住居遺跡に関しても調査報告されている（図2）。また、都城周辺の墓葬も調査されている。

戦国期の燕については、これまで都城に関する研究や、そこからの出土遺物に関する研究がなされている。都城に関しては、他の戦国期の都城との比較研究がなされている。日本では秋山進午氏の論考（秋山 1982）があり、中国側では、最近では許宏氏の論考（許宏 1999）などがある。

一方、出土遺物に関しては、特に都城から出土した貨幣に関して、石永士氏らの網羅的な研究（石永士、石磊 1996）がある。また、燕下都から出土した陶文に関しては馮勝君氏の論考（馮勝君 1998）がある。さらに戦国期の燕で出土する遺物に鉄器があるが、この鉄器に関しては、燕が中原でも東北に位置しているため、日本や朝鮮半島との関係をめぐる研究が多く、潮見浩氏の研究（潮見 1982）や、村上恭通氏による研究（村上 1998）がある。一方、中国でも王巍氏の研究（王巍 1997, 1999）がある。このように、燕についてはこれまで時期的にも、そして研究対象としてもさまざまな方面からの研究がなされてきた。

本論では、これまでなされてきた研究や報告を踏まえながら、戦国期を中心に燕の墓葬に関して、出土遺物とくに副葬陶器を中心に分析を行う。その中で、その変遷觀を整理し、燕の副葬陶器からみた特徴を見出す。さらに、燕における副葬陶器のありかたを周辺の国、特に隣接する中山国との比較をおこない、燕の副葬陶器とそのありかたに関して考察を行う。

II 燕の墓葬に関する研究史

上で簡単に述べたように、燕の地域内では戦国時代を前後する時期の墓葬の発掘調査例が増加しているが（図1），その墓葬に関する研究は、墓葬から出土した副葬陶器に関するものが主流を占めてきた。ここではこれまでなされてきた研究を総括したい。

林巳奈夫氏は『周禮』や『禮記』といった文献に記された、周代の礼制に関して、考古学資料に



図1 燕墓葬関連地図

1 易県・燕下都（九女台墓区・辛庄頭墓区・西貫城村・東沈村・東斗城村・解村）、2 唐山賈各庄、3 濬陽南市区、4 喀左大城子、5 北京城北懷柔、6 張家口下花園区、7 三河北淀・大唐廻、8 北京昌平松園、9 天津張貴庄

による考証を行う研究で、礼制について戦国時代中原諸国家の出土遺物からの分析を行うなかで、燕下都九女台墓区第16号墓（河北省文化局文物工作隊 1965b）出土の青銅器を模倣した陶器の存在に注目した（林 1980）。林氏は、これらの陶器のうち、有蓋簋に関してその器形が陝西省臨潼零口公社出土の西周初期の簋と類似することを根拠に、この有蓋簋を西周期の青銅器からヒントを得て、製作されたものであろうとした。この他にも、九女台墓区第16号墓出土の有蓋簋の各部位の形態的な特徴も、西周前期の青銅器にみられるものであるとした。さらに、九女台墓区第16号墓出土の陶製の方鼎（図3）に関しても、同様にストックホルム遠東博物館所蔵の西周前期の方鼎との類似性を指摘した。また、同墓出土の天円地方尊（図3）についても同様の見解をしめしている。

一方、九女台墓区第16号墓出土の盤（図3）については、それが河北省唐山賈各庄18号墓から出土した青銅盤と形態が類似することを指摘した。林氏はこの唐山賈各庄の墓葬から出土した一連の青銅器に関しては、その年代を春秋時代晚期とし、洛陽中州路第3期に併行するものと考えている。そのため、林氏はこの盤の原型となった青銅器は有蓋簋等とは異なり、春秋晚期のものであると考えている。また、九女台墓区第16号墓から出土した方壺（図7：壺D）に関しても、その器形、そして各部位の特徴が安徽省寿県蔡侯墓出土の青銅壺と類似することから、その原型となった青銅器

戦国期における燕の墓葬について

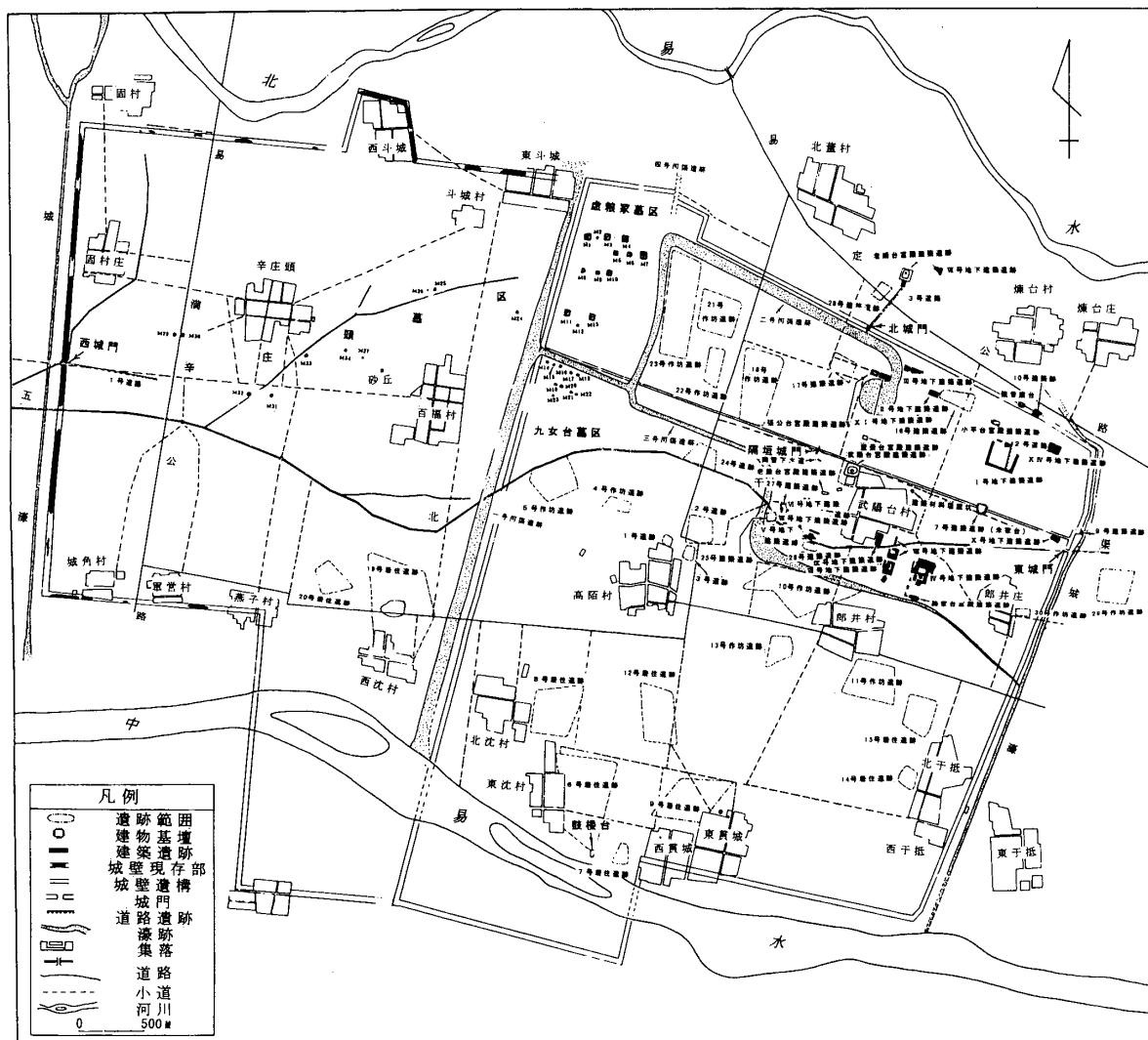


図2 燕下都関連地図（河北省文物研究所 1996」を改変）

が、同様に春秋晚期に属するものであるとした。

また、九女台墓区第16号墓出土の陶製鑑（図3）は上述の盤や方壺の原型の青銅器より時期的に、一段階遅れる紀元前5世紀の青銅器を模倣したものと考えた。特に、その器体にみられる獸面紋について、これと同様の獸面紋が紀元前5世紀の青銅器にみられる獸面紋をスタンプしたものであると考えた。一方、九女台墓区第16号墓出土の壺（図6-35）については、それが墓の造営と同時期のものであるとしている。

これらの分析から、林氏はこの九女台墓区第16号墓から出土する副葬陶器が西周期から春秋期、さらに墓葬と同時期にみられる特徴に分けられ、大きく4つの時期の青銅器を模倣した陶器群であることを考えた。そして、これらの陶器が戦国時代の礼制の実態を示す燕における祭器の一つのセットとして存在したものであるとした。ちなみに林氏はこの墓葬の年代を、報告によって示された年代とは異なり、紀元前4世紀後半頃としている。

石川 岳彦

燕の副葬陶器に関しては、中国側でも研究がなされている。賀勇氏は燕の領域で発見された墓葬から出土した副葬陶器を器種ごとに分類し、その変遷過程を明らかにしようとした（賀勇 1989）。賀勇氏はそれぞれ鼎に関して A, B, C 型、蓋豆に関して A, B 型、壺に関して A, B, C 型、小口壺に関して A, B 型、盤と匝に関してそれぞれ A, B 二つの型に分類し、それを時期別に、5 つの組に分類し、それらを 3 期に編年している。賀勇氏は燕の墓葬から出土する副葬陶器の基本的組合せを鼎、豆、壺、盤、匝とし、これらが他の中原諸国における墓葬の副葬陶器の組合せと一致するとしている。そして賀勇氏は、九女台墓区第16号墓は燕王墓クラスの墓であるとし、この九女台墓区が燕下都という都城内に造営されていることに注目し（図2），燕下都の造営の時期を『水経注』にある「燕下都為武陽城，昭王修築」という記載を根拠に、昭王（紀元前311～紀元前278）の在位時期であるとし、九女台墓区第16号墓の年代を、昭王の在位時期以後のもので、紀元前4世紀末期前後としている。

そして、賀勇氏は燕の副葬陶器に関して中原諸国と基本的に同じ器種構成をもつものの、それぞれの陶器の流行時期が他の中原諸国に比べて遅くなることを指摘し、それが燕の後進性を示すものであるとした。また、その傍証として墓制において竪穴土壙墓が前漢中期にまで燕では残存することも指摘している。上述した林巳奈夫氏の研究との関連でいえば、九女台墓区第16号墓出土の林氏が「復古形態」の陶器と称しているものに関し、賀勇氏はこれらの陶器が燕の文化的な「後進性」を示すものであると解釈している。

宮本一夫氏は、林巳奈夫氏の戦国中期の燕において、西周期と春秋期の青銅礼器を模倣した副葬陶器が製作されたという見解をもとに、燕における春秋後期から戦国期にかけての副葬陶器と青銅器の編年をおこなった（宮本 1991）。

宮本氏は燕における各地域の地域的な特色を考慮に入れながら編年作業を行おうとし、燕下都の存在する河北省易県周辺、また北京市周辺、そして遼寧地域と地域的に区分しながら副葬陶器の編年を行った。宮本氏はその編年の基準として、主に鼎と壺の形態変化に注目し、鼎に関しては腹部が次第に下膨れになり、腹部の側視観が平底化する傾向があるとした。そして、燕下都九女台墓区第16号墓出土の鼎（図6-27）については、その形態が中山国王魯墓（河北省文物研究所 1995）出土の青銅鼎（図16-2）と形態が類似することをあげ、その絶対年代を紀元前4世紀末としている。そして、それ以後の鼎は蓋部の把手や足部の退化がはなはだしいとしている。また、壺についても、戦国期における形態の変化として、胴部最大径が胴中央または胴部上方にあったものが、最大径が上昇し、肩部が張る形態に変化するとしており、九女台墓区第16号墓以後の紀元前4世紀末以後には、腹部下半が急激に収縮し、紋様も退化する傾向にあるとしている。

宮本氏はこれらの編年研究の結果、林巳奈夫氏の指摘した燕における「復古形態」の副葬陶器の製作を紀元前4世紀末頃からとし、その「復古形態」の副葬陶器が周王朝の一族の国である燕における西周の礼制へのあこがれと考え、この時期におけるそれをもとにした王権の強化過程を想定している。

戦国期における燕の墓葬について

また、宮本氏は林氏が述べた「復古形態」の陶器を副葬した九女台墓区第16号墓のような墓から出土する彩絵陶器を副葬する墓を、燕における身分上位者の墓であると指摘している。

石永士氏は、燕下都内、及びその周辺部に存在する墓葬である九女台墓区第16号墓、辛庄頭墓区第30号墓（河北省文物研究所 1996）、解村2号墓（河北省文物研究所 1996）をとりあげながら、そこから出土した副葬陶器を中心とする遺物を紹介しながら、燕下都内外に存在する大、中型墓の検討をおこなった（石永士 1996）。石永士氏は、燕下都の調査、報告において中心的な役割をした人物であり、『燕下都』でもその執筆の中心的な人物でもある。

石永士氏は、九女台墓区第16号墓を戦国早期に編年しており、その根拠は示されていないものの、九女台墓区第16号墓の原報告がこの墓葬の年代を戦国早期に位置付けていることをそのまま踏襲したものと思われる。また、解村2号墓を戦国中期に編年している。そして、辛庄頭墓区第30号墓を戦国晚期に編年している。石永士氏は戦国期における副葬陶器の形態の変化について、鼎については、胴が浅くなること、底部が平坦になることをあげている。また、豆の形態については坏部が浅くなること、壺の最大径が胴部上方から、下方に移ること、圈足が次第に高くなることなどを結論の一部で述べている。なお、『燕下都』のなかで、ここで取り上げた墓葬は正式に報告されているが、年代的な位置付けは、石永士氏の論文における年代観と同様である¹⁾（河北省文物研究所 1996）。

一方、石永士氏は九女台墓区第16号墓や、辛庄頭墓区第30号墓を燕侯、または燕王墓、解村2号墓を高位の貴族墓としている。このように、氏は燕下都内に営まれた墳丘を持ち墓区を形成する大型墓を燕侯墓または、燕王墓としており、氏は文献史料における記載をもとにして燕王墓である九女台墓区第16号墓の年代が戦国早期であるという年代観をもっていることから、氏の主張する燕下都の春秋晚期造営説（石永士 1996、河北省文物研究所 1996、石永士 1998）を証明しようとしているものと考えられる²⁾。

陳光氏は燕下都内の調査において、公表された報告の中から、層位的にいくつかの時期に分割することのできる特定の遺跡の資料をもとに、燕の陶器の編年を行い、その編年案をもとに青銅器の編年を行った（陳光 1997、1998）。

陳光氏は編年をするにあたって、基本的な年代的序列を求めるのに燕下都13号遺址の層序関係（河北省文物研究所 1987a）を利用した。陳光氏はこの遺跡の層位関係が時期の変遷を示すものと考え、それぞれの層位、遺構から出土した遺物の変遷を時期的変遷に対応させようとした。そして、層位的な情報を得ることができる他の燕の領域内に存在した遺跡の情報を集め、生活遺跡から出土する陶器について12組、16の段階を設定した³⁾。そして、陳光氏は墓葬から出土する副葬陶器について、燕式鬲（図4参照）や酙といった墓葬、生活遺跡からともに出土する陶器を利用して、燕の副葬陶器の編年を行おうとした。また、燕の領域内において出土した青銅器に関しても、自らの編年観にそって、それぞれ編年している。

陳光氏の論文は生活陶器や、副葬陶器、そして青銅器も含めて、春秋戦国時代の燕文化の遺物を

石川 岳彦

総合的に編年したものである。そしてその方法論も遺跡の層位を基本においたこれまでとは違ったタイプの研究であるということができる。しかし、この論文が発表されたのは1998年であるが、論文に取り上げられた資料には『燕下都』において初めて発表された資料は含まれておらず、再検討を要する部分も多い。

また、陳光氏は論文の結論部分で、燕の遼東進出の問題を扱っている。そのなかで、遼寧喀左大城子1号墓の年代とその性格を論じている。陳光氏は遼寧喀左大城子1号墓（朝陽地区博物館・喀左県文化館 1985）を第4組・春秋晚期に編年している。陳光氏によれば、この時期はまだ遼西には遼寧式銅劍をもつ文化が存在していたとして、燕の領域に入っていなかったとする。また、遼寧瀋陽南市区陶器副葬墓（金殿士 1959）も春秋晚期頃の墓葬としており、これらの墓葬は燕の流民の墓葬であるとしている。そして、『史記』「匈奴列伝」の記事をあげて、昭王代における遼東進出の記事の妥当性を述べている。

さらに、宮本一夫氏は著書『中国古代北疆史の考古学的研究』のなかで、『燕下都』で報告された墓葬と前論文後に報告された墓葬に関して、青銅器と陶器の編年を行った（宮本 2000）。そして、『燕下都』において報告された大型墓葬の編年を行い、そこにみられる「復古形態」の副葬陶器が大型墓に伴うことを指摘し、社会階層を示す可能性を確認し、「復古形態」の副葬陶器の出現を紀元前4世紀後半とみている。また、宮本氏自身の遼寧省遼陽付近にある戦国墓の出土遺物の実見から、燕による遼寧地域の領域支配完成の時期を戦国後期としながらも、戦国前期の比較的早い時期から北方との交流があったことを新たに示唆している。

III 燕の副葬陶器の分析

1 春秋戦国時代の燕の墓葬

春秋戦国時代における燕の考古学的な遺跡や遺物は、燕の春秋期、特に春秋時代前半の遺跡、墓葬は、ほとんど明らかではない。現在、春秋時代の墓葬として報告されているのは河北徐水大馬各庄の墓葬群（河北省文物研究所他 1990）のみであるといつてもよい。この墓葬は日常陶器を少數ずつ副葬する小型墓葬である。また、河北唐山賈各庄遺跡（安志敏 1953）の青銅器を副葬する墓葬に関しては、報告では戦国期の墓葬とされているが、その後、林巳奈夫氏や宮本一夫氏は、唐山賈各庄16号墓などから出土した青銅器は洛陽中州路第3期（中国科学院考古研究所 1959）に併行するもので、春秋晚期のものであるとしている。一方、燕において戦国期のものとされている墓葬の報告は春秋期と比較して圧倒的に多い（図1）。このような現状のもとで、ここでは春秋戦国時代の燕の墓葬に関して、副葬陶器を中心に分析してみたいと思う。

戦国期における燕の墓葬について

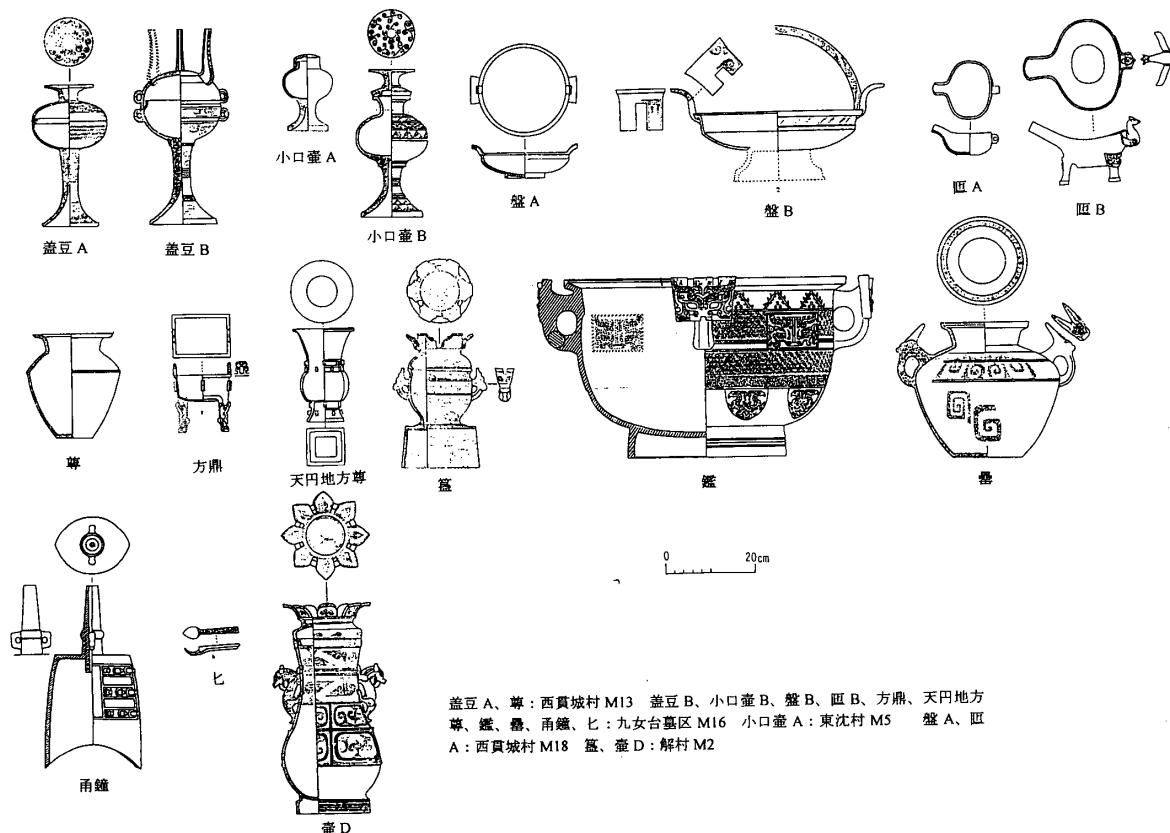


図3 燕の副葬陶器の器種分類

2 燕の副葬陶器の分析

① 副葬陶器の分類について

ここでは、燕の副葬陶器の分類を行う。分類では、まず器種レヴェルでの分類をおこない、その後、器種ごとにその形態による分類をおこなう。分析の対象としては、ある程度、他の墓葬との比較が可能な複数墓葬間に共通に存在する器種が中心となるが、その他の特殊な器種についても適宜、分析のなかで触れたい。

燕の墓葬では副葬陶器として、主に次のような器種が存在する。鼎、豆、壺、小口壺、盤、匜、尊、方鼎、天円地方尊、簋、鑑、罍、匕、甬鐘などである。この名称に関しては、賀勇氏、宮本一夫氏等の編年（賀勇 1989, 宮本 1991・2000）における器種名を参考に、必要に応じて修正した。

② 器種の分類基準（図3及び図6参照）

鼎は形態によって4種類に分類される。

鼎 A 類（図6）

鼎 A 類は、器体は、深い円柱状の胴部をもつ。

石川岳彦

鼎 B 類 (図 6)

鼎 B 類は、把手が鼎 A 類よりも外反し、胴部は丸みをもった曲線的な形態をしている。足部は直線的で長さは短い。

鼎 C 類 (図 6)

鼎 C 類は、胴部に付いた把手がその先端で、鼎 A 類や、鼎 B 類以上に強く屈曲し、巻いたような形状をなすものもある。

鼎 D 類

鼎 D 類は、上で分類してきた鼎とは異なり、鼎の把手が巻かない形態で、鼎を側面から見たとき、把手は外形が方形をなし、その中に方形の孔をあけた形状をなす。この形態の鼎は、さらに装飾によって二つに分類され、それぞれ鼎 D 1 類、鼎 D 2 類とする。

鼎 D 1 類 (図 6)

鼎 D 1 類は鼎の胴部器表に横沈線紋などを施すだけの簡単な装飾を施すものである。

鼎 D 2 類 (図 6)

鼎 D 2 類は、鼎 D 1 類と外形は類似するものの、装飾において鼎 D 1 類とは異なり、幾何学的な紋様が主に施され、蓋にも同様の紋様が施される。この他、蓋部に付くつまみは虎などの動物を形象したものである例が多い。

蓋豆は蓋部の形態によって 2 つに分類される。

蓋豆 A 類 (図 6)

蓋豆 A 類は、蓋部が高壺を逆にしたような形態をなすものである。

なお、この形態の陶製の蓋豆は、青銅器の蓋豆を模倣したものと考えられ、宮本一夫氏はこの模倣された形態の青銅製蓋豆を豆 I 類としている。宮本氏や林氏はこのような高い脚部をもつ青銅豆を燕独特の豆であるとしており、この時期の他の中原諸国の青銅豆と比較する時、肯首すべきものであろう。

蓋豆 B 類 (図 6)

蓋豆 B 類は、その蓋部に三本の長い突起がつく形態をしている。この形態の陶製蓋豆も、やはり青銅製の蓋豆を模倣したものであり、宮本一夫氏はこの形態の青銅蓋豆を豆 II 類としており、この形態の青銅豆についても、林巳奈夫氏や宮本氏は燕独自の形態としている（林 1989, 宮本 1991,

戦国期における燕の墓葬について
宮本 2000)。

壺は、その形態によって4つに分類される。

壺 A 類（図 6）

壺 A 類は胴部に、幾何学的紋様や鳥や魚、虎といった動物紋が描かれる壺である。そのうち、幾何学的紋様に関しては、往々、鼎 D 2 類に施される紋様と同じモチーフが選択される場合もある。

壺 B 類（図 6）

壺 B 類は外形上は壺 A 類と同じではあるが、無紋、もしくは横沈線のみが胴部に施される壺である。

壺 C 類（図 6）

壺 C 類は壺 A 類や壺 B 類がセットとして蓋をもつと異なり、蓋部を持たず、無紋で胴体部に装飾付きの鉗を持つものである。

壺 D 類（図 3）

壺 D 類は、いわゆる方壺で、林巳奈夫氏等が青銅器を模倣した「復古形態」の副葬陶器（林 1981）としたものである。

小口壺は、蓋部の形態により2つに分類される。

小口壺 A 類（図 3）

小口壺 A 類は、その蓋部が饅頭状の形状を呈するものである。

小口壺 B 類（図 3）

小口壺 B 類は、その蓋部の形態が小型の高壠を伏せたような形態で、胴部と組み合わされる。

盤は、その形態により2つに分類される。

盤 A 類（図 3）

盤 A 類は、圈足を持たない、または持っていても非常に低いものである。

盤 B 類（図 3）

盤 B 類は、圈足を持つが、盤 A 類に比べて高い圈足を持ち、その高さは 5 cm を越える。

匜は、その形態により 2 つに分類される。

匜 A 類（図 3）

匜 A 類は、器体が円形のなし、注口が付く。そして把手は半円形の形状をなす。

匜 B 類（図 3）

匜 B 類は、匜 A 類とは異なり、把手が鳥頭を形象したものであり、さらに器体全体が鳥形をなすものである。

匜については盤と各墓葬で、その存在の有無、さらには出土点数においてセット関係として対になるという特徴がある。さらに、北京懷柔 56 号墓（北京市文物工作隊 1962）が盤 A 類と匜 B 類が対応する関係にある以外は、基本的に盤 A 類と匜 A 類が、盤 B 類と匜 B 類が同一墓葬から出土するというセット関係にある。このことは、盤と匜が水を注ぐもの（匜）と、それを受けるもの（盤）という礼制に関係する器種であることをしめすもの（林 1981）であると思われる。

尊（図 3、図 6）は、燕においては口縁部が屈曲外反し、肩部が張るという器形において特徴がある。尊自体は、燕において春秋戦国時代を通して、生活遺跡からの出土例がみられる。

以下であげる副葬陶器は、上述したように林巳奈夫氏によって、西周期から春秋期にかけての時期の青銅器を、模倣して製作されたと考えられたいわゆる「復古形態」の副葬陶器（林 1981）である。

方鼎（図 3）が出土しているのは河北易県燕下都九女台墓区第 16 号墓（河北省文化局文物工作隊 1965b）から 4 点、同じく燕下都辛庄頭墓区第 30 号墓（河北省文物研究所 1996）から 7 点である。このように、この器種の出土例は燕下都内に墓群をなして存在する大型墓葬に限られる。

天円地方尊（図 3）は、河北易県燕下都九女台墓区第 16 号墓（河北省文化局文物工作隊 1965b）から 1 点出土した。

簋（図 3）は、河北易県解村 2 号墓（河北省文物研究所 1996）から 6 点、河北易県燕下都九女台墓区第 16 号墓（河北省文化局文物工作隊 1965b）から 12 点、同じく燕下都辛庄頭墓区第 30 号墓（河北省文物研究所 1996）から 6 点出土している。また、河北灤河戦国墓葬、北京昌平松園 1、2 号墓（蘇天鈞 1959）からもそれぞれ簋が出土しているというが、その出土点数は不明である。

鑑（図 3）は、河北易県燕下都九女台墓区第 16 号墓（河北省文化局文物研究所 1965b）から 4 点、また同じく燕下都辛庄頭墓区第 30 号墓（河北省文物研究所 1996）から 1 点出土しており、そ

戦国期における燕の墓葬について

の出土墓葬は燕下都内に墓区を形成して営まれた大型墓葬に限られるようである。

壺（図3）は、河北易県解村2号墓（河北省文物研究所 1996）から2点、河北易県燕下都九女台墓区第16号墓（河北省文化局文物工作隊 1965b）から4点出土した。

甬鐘（図3）は、河北易県燕下都九女台墓区第16号墓（河北省文化局文物工作隊 1965b）から35点出土した。また、同じく燕下都辛庄頭墓区第30号墓（河北省文物研究所 1996）から42点出土している。このように甬鐘に関しても鑑や方鼎と同様に、現在までの出土墓葬は燕下都内に墓区を形成する大型墓葬に限られるようである。

③ 分析

上述のように器種と器種内における形態による分類を行ってきたが、この分類をもとに燕の副葬陶器の分析を行っていきたい。ここでは、分析は大きく2つの方向付けをもって行う。

まず、第1の分析はその組合せをもとに編年を行う。その場合、この第1の分析によって得られた墓葬ごとの副葬陶器の組合せが時間軸に並ぶものなのか、それとも墓葬、または被葬者自体の性格による違いなのかを明らかにする。そして、この編年作業の中では第1の分析によって得られた副葬陶器の組み合わせのグループに共有してみられる器種、または器種以下の類単位における陶器の形態的な変化を考慮にいれる。

第2の分析は編年行ったのち各墓葬における各器種（または各器種以下の類レヴェルもふくむ）の副葬組合せを分析し、副葬陶器や墓葬の特徴を勘案しながら、燕における墓葬の特徴を考察することにする。

これから行う分析はこのような大きく2つの分析方向を念頭において行い、燕における副葬陶器及び、それを副葬する墓葬の実態を明らかにしたい。

(1) 墓葬ごとの副葬陶器組合せの分類

各墓葬において、上述した基準による副葬陶器の組合せの一覧は表1のようになる。このようにしてみると、組合せにおいていくつかの特徴を見出すことができる。

- 1) 盖豆はA, B類に関わらず、ほとんどの墓葬において副葬される⁴⁾。
- 2) 同様に鼎もA, B, C, D類の関わりなくほとんどの墓葬において副葬される。
- 3) 分類の基準設定のところでも述べたように盤と匝は墓葬における有無、副葬点数において対応関係にある。また、盤と匝、さらに小口壺の副葬の有無には相関関係がありそうである。
- 4) 壺、尊、そして一連の「復古形態」の副葬陶器に関しては各墓葬においてその副葬の有無がそれぞれにみられるが、ある一定のまとまりを見出すことができる。なお、「復古形態」の副葬陶器を副葬する墓葬には例外なく、盤と匝が副葬される。

各墓葬において、このような大まかな組合せの特徴がみられたが、ここでは次のような基準によってこの組合せを分類し、さらに詳しく分析したい。

表1 戰國燕墓葬出土土器器種表

		鼎				蓋豆		壺				小口壺		盤		匜		尊	方鼎	天円地方尊	簋	鑑	罍	甬鐘	文献	
		A	B	C	D1	D2	A	B	A	B	C	D	A	B	A	B	A	B								
i	a	賈各庄M8	1	1			1												1							1
		賈各庄M32	1				1																			1
	b-1	西賁城村M8		1			1																			2
		西賁城村M13		2			2	2																		2
ii	b-2	西賁城村M14			1						1															2
		西賁城村M18		2			2		2			2		2		1	1									2
	b-1	易県M2		2			2		2			2		2		1	1									3
		賈各庄M16		2					1	1																1
	b-2	賈各庄M31		1			2			2																1
		下花園区M1			1		2		2																	4
		下花園区M3			1		2	2																		4
		張賁庄M10		1					2																	5
		賈各庄M23					2		2																	1
		張賁庄M3			1				2																	5
b-3	b-2	東沈村M5			3		2	1			2		1		1											2
		懷柔M50		1		2	2			2		1		1												6
	b-2	瀋陽市南市区		1				2					1		1											7
		下花園区M2		1		2	2						1		1											4
	b-2	喀左大城子M1		2		2		2					1		?											8
		北淀M3		2		2		2		2		1		1												9
	b-3	懷柔M56			1	2	2					1	1		1											6
		解村M2			6		4	2		2	6		1		1						6	2			2	
b-3	b-3	九女台墓区M16			10		1	5		6	14		2		2	4	1	12	4	4	35	10				
		東斗城村M29		3		2	2				3		1		1											11
	b-3	昌平松園M1					?		?		?		?		?											12
		辛庄頭墓区M30			10		3		3				1		1	7		6	1	42	2					13
	b-3	灤河戰國墓			2	2			2				1		1				2							
		昌平松園M2					?		?		?		?		?											12

鼎A - 把手はBほど外反せず、深い円柱形の胴部をもつ

鼎B - 把手はCほど外反せず、丸みを持つ器形、直線的な短い足

鼎C - 把手の先端が巻く形態

鼎D - 把手の先端部が巻く形態ではない

鼎D1 - 器体に横線を施すだけの装飾

鼎D2 - 器体に紋様や装飾、蓋に動物を形象する把手などがつく

蓋豆A - 杯を伏せたような形態の蓋

蓋豆B - 蓋部の上部に三個の突起がつく

壺A - 脊部に幾何学紋、動物などが描かれる

壺B - 脊部が無紋、もしくは横線のみ施される

壺C - 無蓋、肩部に装飾を施した鉢がつく

壺D - 方蓋

小口壺A - 饅頭状の蓋を持つ

小口壺B - 小型杯を伏せたような形態の蓋

盤A - 低い脚部

盤B - 高い脚部

匜A - 半円形の把手がつく

匜B - 把手が鳥頭を形象、または匜全体が鳥を形象

(? は存在するものの、出土点数が不明なもの。)

i - 尊をもつ

ii - 尊をもたない

a - 壺をもたない

b - 壺をもつ

1 - 匝・盤を持たない

2 - 匝・盤をセットでもつ

3 - 2 の条件に加え復古形態の土器を持つ

■ 棚のみもつ

■ 柳と棚をもつ

■ 内外棚または内外柳を持つ

□ 詳細不明

引用文献	
1	安志敏1953
2	河北省文物研究所1996
3	河北省文化局1965d
4	張家口市文管處他1988
5	天津市文化局1965
6	北京市文物工作隊1962
7	金殿1959
8	朝陽地区博物館他1985
9	廊坊地区文管所地1987
10	河北省文化局1965b
11	河北省文化局1965c
12	蘇天鈞1959
13	馮秉其1957

戦国期における燕の墓葬について

尊の副葬の有無⁵⁾

- i 尊を副葬する
- ii 尊を副葬しない

壺の副葬の有無

- a 壺を副葬しない
- b 壺を副葬する

上述3) のように小口壺、盤と匜の副葬の有無に関しては対応関係がありそうだという方針が得られたが、ここではより確実な共伴関係をみせ、かつ小口壺の副葬の有無をも包括できる盤・匜の副葬の有無に注目したい。

- 1 盤・匜をセットで副葬しない
- 2 盤・匜をセットで副葬する

林巳奈夫氏が指摘した「復古形態」の副葬陶器（林 1981）の有無

- 3 2の条件に加え、「復古形態」の副葬陶器を副葬する

以上のような副葬陶器の組合せの分類基準をもとに各墓葬を分類、そしてその墓葬における出土点数をまとめると表1に示した分類になる。ちなみに、ii組においては壺を持たないものは存在しないのでa組に属するものは無い。

以上の分類の特徴を以下にまとめてみる。

i - a組

このグループは尊を副葬し、壺を副葬しないグループである。器種としては鼎、蓋豆、尊の3つの器種のみをもつ。蓋豆はすべてA類である。鼎は河北唐山賈各庄8号墓（安志敏 1953）でA、B類（図8-1、2）、同じく賈各庄32号墓ではB類（図8-3）を副葬する。また、河北易県西貫城村8号墓（河北省文物研究所 1996）ではC類を副葬する。鼎A、B類はすべてこのグループに属する。出土点数は蓋豆が1点ずつであり、他の器種についてもそれぞれ1、2点のみである。

i - b - 1組

このグループの器種構成は鼎、蓋豆、壺、尊である。鼎はD1類、C類が存在する。壺はA類、C類が存在する。このうち、河北易県西貫城村14号墓（河北省文物研究所 1996）に関しては、陶製豆がないものの、青銅製鼎、豆が存在する。

石川岳彦

i - b - 2組

このグループは、構成器種としては鼎、蓋豆、壺、尊、小口壺、盤、匝である。これら器種のうち、鼎はC類、蓋豆はA類、壺はB類である。鼎、蓋豆、壺について副葬点数はi - b - 1とはほぼ変わらない。小口壺は2点ずつ出土し、A類のみである。盤、匝はそれぞれA類で、1点ずつ存在する。

ii - b - 1組

このグループの構成器種はそのほとんどが鼎、蓋豆、壺である。鼎は河北唐山賈各庄16号墓、同じく賈各庄31号墓でC類が出土している他は、すべてD1類である。出土点数はほとんどが1点である。蓋豆はすべてA類である。壺は河北唐山賈各庄16号墓（安志敏 1953）と河北張家口下花園区3号墓（張家口市文管所・下花園区文教局 1988）でA類が出土する他はB類またはC類である。

河北唐山賈各庄16号墓は鼎C類が2点出土するなど、他の墓葬に比べて趣を異にするが、この墓葬からは青銅製の盒子や青銅武器の他、青銅敦が出土している。

ii - b - 2組

このグループの構成器種はそのほとんどが鼎、蓋豆、壺、小口壺、盤、匝である。このうち、鼎については北京懷柔56号墓で鼎D2類（図6-20）がみられるほかは、すべてD1類である。鼎の出土点数は、ほとんどが1点であるが、河北北淀3号墓（廊坊地区文物管理所・三河県文化館 1987）で2点、河北易県東沈村5号墓（河北省文物研究所 1996）で3点出土している。蓋豆は出土資料すべてがA類である。壺に関しては、A類及びB類がみられる。小口壺は懷柔56号墓がB類であるほかはA類である。また、盤と匝に関しても懷柔56号墓出土の匝がB類であるほかはすべてA類である。このように、このグループにおいて、懷柔56号墓は特殊な状況をみせているということができよう。

ii - b - 3組

このグループの構成器種はそのほとんどが鼎、蓋豆、壺、小口壺、盤、匝、そして一連の「復古形態」の副葬陶器である。このグループに属する墓葬から出土している鼎はすべてD2類である。また出土点数も10点に達するものもある。また、他の器種についても他のグループとは異なった様相をみせる。蓋豆はすべてB類である。また、壺もすべてA類で、A類の他に「復古形態」の副葬陶器である方壺の壺D類が存在している。また小口壺も河北易県解村2号墓（河北省文物研究所 1996）をのぞいてB類がみられる。さらに盤と匝についても同じく解村2号墓を除いて盤B類と匝B類の組合せである。このグループでは、解村2号墓がやや他の墓葬とは副葬陶器の類レヴェルの比較において異なった様相をみせている。

戦国期における燕の墓葬について

これまでみてきたように、燕の墓葬において副葬される陶器はその種類によって、かなり特徴をもって、いくつかのグループに分割することができることがわかった。それではこのようなそれぞれの副葬陶器における組合せのグループがいったいどのような意味を持つのかを考えていきたい。

(2) 編年

i 尊副葬墓の分析（青銅器副葬墓との年代の関係）

これまで分類してきた結果をまとめると燕における副葬陶器の器種の組合せには以下のようになる。

鼎 + 盖豆 + 尊 + (a) i - a 組

鼎 + 盖豆 + 壺 + 尊 + (a) i - b 組

鼎 + 盖豆 + 壺 + (a) ii - b 組

このように、燕の墓葬においては副葬陶器の組合せにおいて3つのパターンがあることがわかる。ここでは、まずi - a組とi - b組の相違点について考えたい。

1 - a組において河北唐山賈各庄第8号墓や賈各庄32号墓から出土する尊は報告においては、賈各庄8号墓、賈各庄32号墓出土の尊は、共に肩部の張り、丸底の尊である（安志敏 1953）。これらの尊は、i - b組においてみられるもの（図6-11）とは形態が異なっている。賈各庄8号墓や賈各庄32号墓から出土するような形態の尊を副葬し、青銅器も共に副葬する墓葬が賈各庄にみられ、それが賈各庄18号墓である。

この賈各庄18号墓からは銅勺、銅盤、銅匝、銅壺、銅敦、銅豆、銅鼎が1点ずつ出土し、他に青銅製武器や青銅製馬具が出土している（安志敏 1953）。このうち、報告によって写真や図面などにより実態が明らかな青銅器に関して、これまで多くの先行研究がある。

林巳奈夫氏はこれらの青銅器のうち、鼎が洛陽中州路第3期の鼎と形態が類似するとしてこの時期に併行するものと考えており、春秋晚期のものとしている。陳光氏もこの鼎について同様の見解を示しており、その時期を春秋晚期、実年代では紀元前500年前後を考えているようである（林 1989）。一方、宮本一夫氏も林氏の見解を参考に賈各庄18号墓出土の青銅器の編年を行っているため、紀元前6世紀後半と実年代を考えている（宮本 1991, 宮本 2000）。このように、賈各庄18号墓から出土する青銅鼎は、洛陽中州路2729墓出土の青銅鼎（中国科学院考古研究所 1959）に形態が類似しており、洛陽中州路第3期に併行するものと考えられる。

一方、i - a組とは異なる形態の尊を出土し、i - b - 1組のパターンに属する河北易県西貫城村14号墓からは、鼎D1類や壺C類が出土している（図6-6, 8）。その他に青銅鼎、青銅豆、他に青銅武器が出土している（河北省文物研究所 1996）。このうち、青銅鼎はその足部を失ってい

石川 岳彦

るものの胴部や蓋部は残存している。この鼎は、蓋部や胴部に蟠螭紋が施されている。この鼎は胴部や蓋部の形態が賈各庄18号墓出土の青銅鼎とは異なっている。この鼎は体部の形状が橢円形に近い。このような体部を持つ青銅鼎に類似するものとして、山西省長子県7号墓出土の青銅鼎（報文：図3-10：I式鼎）（山西省考古研究所 1984）がある。この鼎を報告者は洛陽中州路2712墓（中国科学院考古研究所 1959）出土の青銅鼎と形態が類似するとして、洛陽中州路4期に併行するものとしている（山西省考古研究所 1984）。また、林巳奈夫氏も長子県7号墓出土の鼎を氏の編年による戦国IA期のものとしている（林 1989）。このi-b組にみられる陶器は尊をはじめ、鼎、蓋豆の形態に強い共通性がみられる。よって、この一群の墓葬は、ほぼ同時期と考えてよいだろう。

この他、ii-b組に属するが、鼎C類を出土し、西貫城村14号墓出土の壺C類（図6-8）と類似する壺C類を出土した、賈各庄16号墓でも青銅製の敦が出土している（安志敏 1953）。これと形態が類似する敦としては、北京市通県中趙甫出土の青銅敦がある（程長新 1985）。ここから出土した青銅器は報告では、戦国中晚期のものとされているが、その根拠は明らかではない。中趙甫出土の青銅器群に関しては、林巳奈夫氏は青銅器群がすべて同一時期のものとは認めないものの、すべて時期的に春秋晩期におさまるものとしている（林 1989）。

一方、宮本一夫氏は中趙甫出土の豆や鼎に施される紋様が、年代的に紀元前6世紀後半とした賈各庄16号墓段階に位置付けられる青銅器の紋様に比べて退化しているとして、賈各庄16号墓段階より一段階遅れる紀元前5世紀前半のものであると考えた。さらに、西貫城村14号墓出土の青銅器を中趙甫の青銅器より一段階遅れる紀元前5世紀後半のものと考えている（宮本 1991, 宮本 2000）。

また、陳光氏は中趙甫から出土した青銅器の中に、蓋豆B類（図6）と同じ形態をなす青銅豆が存在すること、青銅鼎の腹部の形態が河北易県燕下都九女台墓区第16号墓から出土する副葬陶器などが属す陳光氏の編年による第8組の陶器と類似することをあげ、第8組に編年しており、戦国時代中期後半に編年している⁶⁾（陳光 1997, 1998）。

中趙甫出土の鼎の体部は賈各庄18号墓出土の青銅鼎に比べて丸みを帯び、また足部も短くなり、洛陽中州路4期（中国科学院考古研究所 1959）併行の青銅鼎に近くなっている。よって、中趙甫出土の青銅器は賈各庄18号墓の青銅器より時期的に下る可能性が高い。よって、中趙甫出土と同様の敦を出土する賈各庄16号墓も賈各庄18号墓より遅れる可能性が高い。また、賈各庄16号墓は尊をもたないものの、鼎C類や壺C類の形態がi-b組にみられるものとかなり類似している。よってi-b組に属する陶器とほぼ同一時期と考えられる。よって、西貫城村14号墓とは時期的に同一段階と考えた方が妥当であろう。

以上の事実を考慮に入れれば、i-a組とi-b組の違い、つまり壺を副葬するかしないかということは時期差と考えられるのである。また、燕においては副葬陶器の器種が基本的に次のように変化したと考えたい。

戦国期における燕の墓葬について

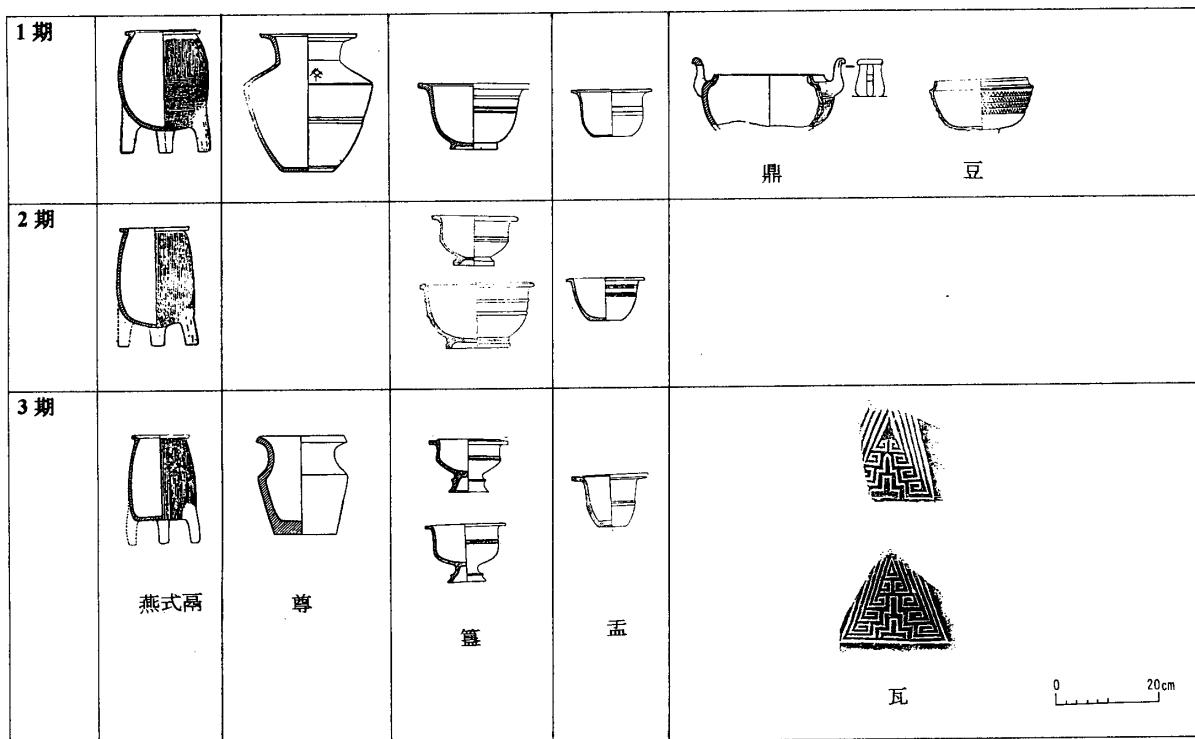


図4 燕下都郎井村10号遺址出土陶器

鼎 + 盖豆 + 尊 + (a) i - a 組



鼎 + 盖豆 + 壺 + 尊 + (a) i - b 組

次に i - b 組と i - b 組の副葬陶器を分析することにする。燕下都調査の結果をもとに、壺の形態差を考慮に入れながら分析したい。

ii 燕下都の調査による編年

燕下都の調査報告である『燕下都』では、燕下都内に存在する宮殿遺跡や工房遺跡などが調査報告がなされているが、これらの遺跡で出土した陶器の中には、墓葬から出土する陶器が一部出土しており、副葬陶器の編年を考える際に非常に有効な資料となる。このうち、比較的長い期間にわたっての遺物が層位的に出土した遺跡として郎井村10号作坊遺址（河北省文物研究所 1996）（図2）をあげることができる。ここでは、この郎井村10号作坊遺址の報告をもとに分析を行いたい。

郎井村10号作坊遺跡は東城南半部の北側にあり、燕下都東城を北半部と南半部を分ける濠に面し、武陽台村のちょうど南側にあたる。遺跡は1972～73年、74年、76年、77～78年の4次にわたって調査され、発掘面積は206,400平方メートルである。堆積層は地点によって異なるが、最上層は耕土層であり、その下に3から4つの層がみられるようである。出土遺物を分析した結果、最下層が戦国早期、そして中期、最上層が戦国晚期の文化層であると報告されている（河北省文物研究所

石川 岳彦

1996)。この報告でなされた時期と層位との関係についてであるが、層位や遺構の切り合いをもとにして、これ以上の細分を報告によって提示されている情報から議論することは、可能なものではないと思われ、ここではこの3時期に時期を分割する報告の内容に従いたい⁷⁾。この層位学的情報を基にしたこの時期区分はかなり妥当なものと思われるからである。

報告では、具体的に個々の遺物に関する変遷観や編年を示してはいないが、報告を基に各器種ごとの変遷を簡単にまとめると図4のようになる。これらの生活陶器の編年は上述したように陳光氏によってなされている（陳光 1997, 1998）が、細分に過ぎた部分があり、ここでは基本的な変遷を示すものとして、資料的にも充実している郎井村10号作坊遺址の遺物の変遷観をとりたい。なお、報告においてなされている、「戦国早期」「戦国中期」「戦国晚期」という時期決定は、実年代の基準としての根拠に乏しく、ここではそれぞれ「郎井村10号遺址1期」、「郎井村10号遺址2期」、「郎井村10号遺址3期」と変えて呼称することにする。

この郎井村10号作坊遺址では、墓葬からも出土する陶器では燕式鬲と尊がみられる。このうち燕式鬲は燕独自の形態をもつ夾砂紅陶の鬲で、円筒状の胴部と比較的長い足部をもつ。郎井村10号作坊遺址では燕式鬲が3点報告されており、それぞれ郎井村10号遺址1期、2期、3期に1点ずつである（図4）。しかも、これら3点はそれぞれ形態を異にしており、形態の変化を合理的に追うことのできる良好な資料である。

郎井村10号遺址1期のものとして報告されている燕式鬲は、口縁下がくの字形に屈曲し側面から見た時がかなり丸みをもつ形態をなす。また、陶器製作の際につけられたタタキによる繩蓆紋が口縁側上半部は縦向きで、底部側下半部は横向きである。

これに比べ、郎井村10号遺址2期のものとして報告されている燕式鬲は、1期の燕式鬲に比べ、側面がかなり直線的になっており、底部付近はまだある程度丸みをもっている。一方タタキによる繩蓆紋の方向は口縁部から底面付近まで縦方向になり、底部付近のみ一部斜めの繩蓆紋がみられる。これは鬲の製作法の変化に伴うものと思われる。

郎井村10号作坊遺址で郎井村10号遺址3期のものとして報告されている燕式鬲は胴部側面が、それ以前のものに比べてさらに直線的になり、底部はもほぼ平坦になっている。また、製作時のタタキによる繩蓆紋も、足部と胴部との接合部分に一部不規則な方向の繩蓆紋が見られる他は、口縁から底部に向かってほぼ縦方向のみの繩蓆紋だけである。

このように、燕式鬲は相対的な時間軸にそって、良好に変化を捉えることのできる器種である。燕の墓葬において、この燕式鬲を出土している墓葬は存在するが、その他の副葬陶器との共伴関係が確実なのは、北京懷柔50号墓（ii-b組）（図6-21）（北京市文物工作隊 1962），河北易県東斗城村29号墓（ii-b組）（図6-28）（河北省文化局文物工作隊 1965c），北京灤河戦国墓葬（ii-b組）（馮秉其 1957）である。

このうち、北京懷柔50号墓から出土している燕式鬲（図6-21）は比較的丸い胴部をもち、繩蓆紋の方向は上部が縦と下部が横の二つの方向がみられる。郎井村10号遺址1期に編年されている燕

戦国期における燕の墓葬について

式鬲に形態が近い、しかし懷柔50号墓出土の燕式鬲のほうが胴体部側面の形態がやや直線的であり、また、タタキによる繩蓆紋の方向は胴体部の大部分が縦方向になっており、懷柔50号墓のほうがやや時期的に遅れる可能性を指摘することができよう。

河北易県東斗城村29号墓から出土した燕式鬲（図6-28）は、北京懷柔50号墓出土の燕式鬲に比べて胴部の側面が直線的になっている。またタタキによる繩蓆紋の方向も図面に記される限りにおいては、縦方向のみであり、底部の形態が丸みをもつことを考えると、郎井村10号遺址2期のものと編年されている燕式鬲に近い。よって、北京懷柔50号墓と河北易県東斗城村29号墓の時期的な関係は懷柔50号墓が東斗城村29号墓に比べて、古いというものになる。

次に、河北灤河戦国墓葬から出土した燕式鬲は、報告に写真のみ載せられ、細部が不鮮明であるが、胴部側面は完全に直線的になり、底部も平坦になっている。また、タタキによる繩蓆紋の方向も縦方向のみであり、形態的には郎井村10号遺址3期のものとして報告されているものに最も近い。以上の事実を根拠にすると、燕式鬲によって、3つの墓葬の相対的な編年は次のようになる。

北京懷柔50号墓→河北易県東斗城村29号墓→河北灤河戦国墓葬

郎井村10号作坊遺址では燕式鬲のほか、鼎や尊や豆も出土している（河北省文物研究所 1996）。このうち、郎井村10号遺址1期に編年されているものについて検討したい。このうち鼎は胴部下半と蓋部、及び足部を失ってはいるが、把手が強く外反し、鼎の分類ではC類（図6）に属することが明らかである。また、尊は肩部が強く屈曲する形態をなし、鼎、豆、壺、尊の組合せの墓葬（i-b組）から出土する尊（図6-11）に形態が近い。また、豆は坏部のみの出土ではあるが、底部が平坦で坏部表面には鋸歯紋が施されている。これら3点の遺物は郎井村10号作坊遺址内のT11第4層H138から一括で出土しており、遺物の同時代性を極めて厳密に考えることができる資料である。たとえば、H138から出土した尊や底部が平坦な坏部をもつ盖豆は、河北易県西貫城村8、13、14、18号墓、河北易県2号墓（河北省文物研究所 1996）から出土しており、これらのほとんどの墓からは、鼎C類が出土すること、そしてほとんどが鼎、盖豆、壺、尊の組合せ（i-b組）をもつ。以上のことからi-b組に属する墓葬の一群は同時期として認定することができるがあらためて確認できるだろう。

郎井村10号遺址1期のものと編年されている燕式鬲はH138において共伴した遺物ではないため、厳密意味での同時期性は確認できないものの、報告に従って同時期性を認め、これらを郎井村10号1期として一時期にみた場合、郎井村10号遺址1期の燕式鬲よりやや時期が遅れる可能性のある燕式鬲を副葬する北京懷柔50号墓は郎井村10号1期後半、またはそのあとの段階に位置付けられる。

以上のことまとめた河北易県西貫城村13号墓（河北省文物研究所 1996）を含めての、4つの墓葬の相対編年は次のようになる。

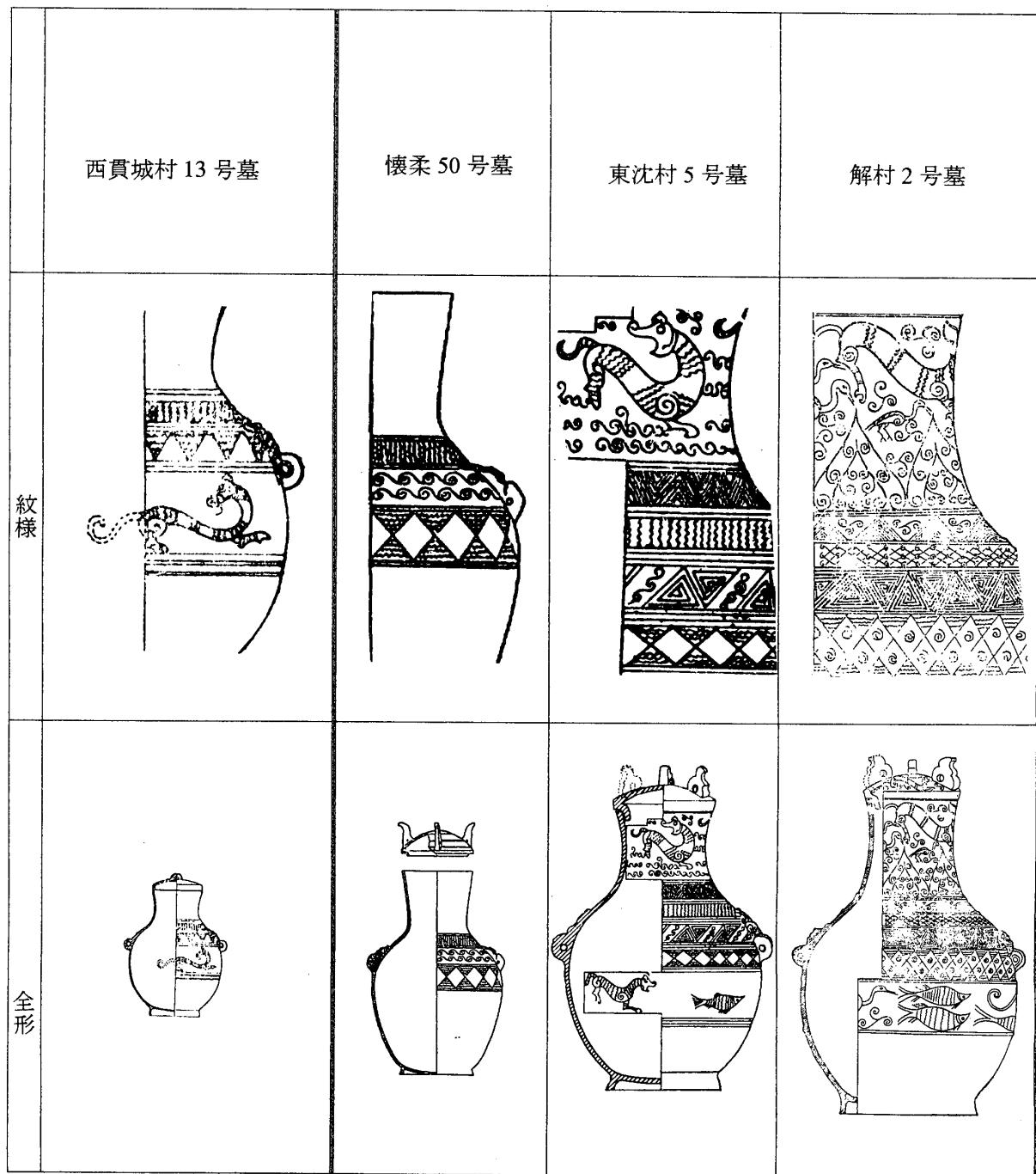
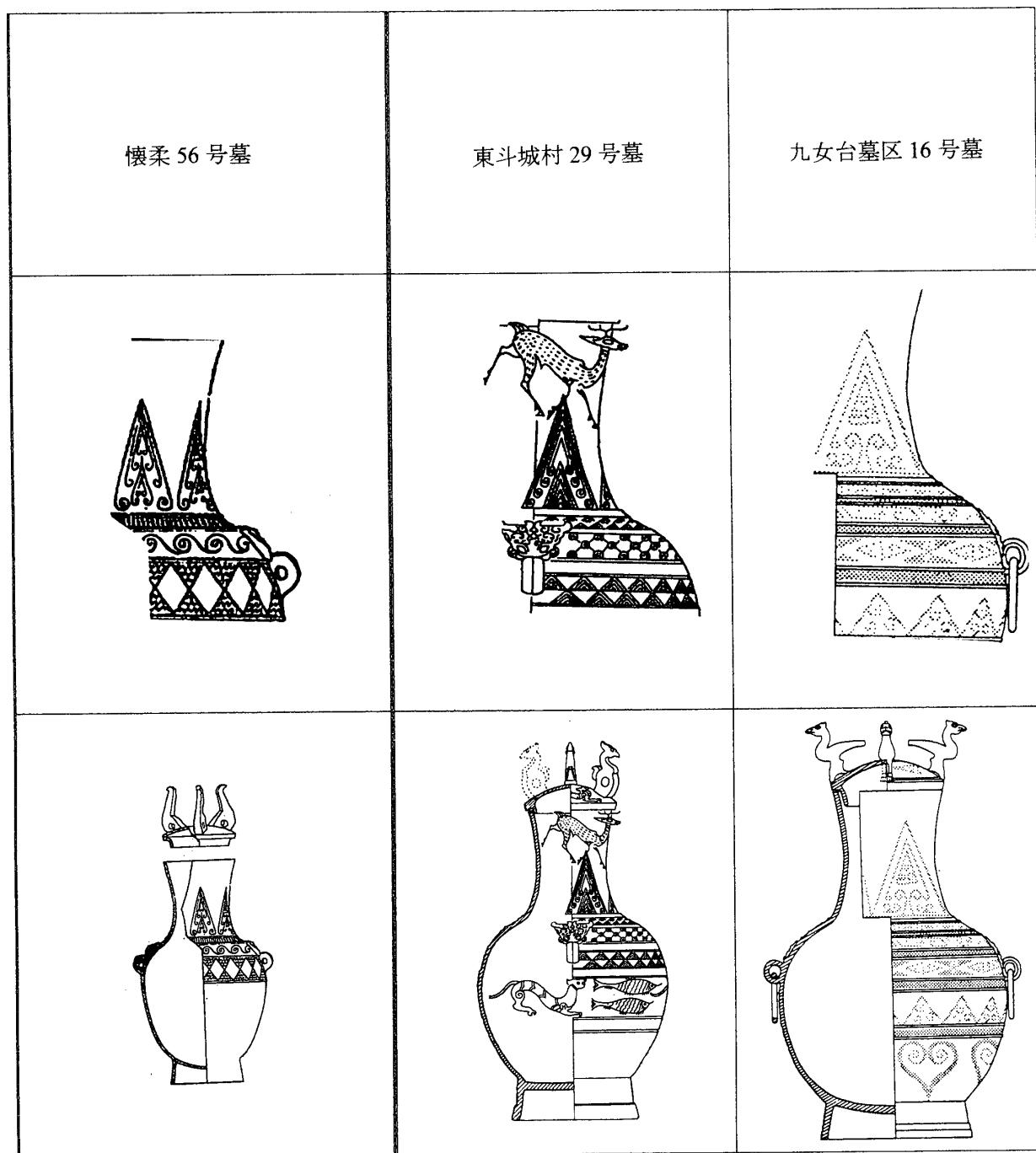


図5 壺 A 類の変

戦国期における燕の墓葬について



遷図（縮尺不同）

河北易県西貫城村13号墓



北京懷柔50号墓



河北易県東斗城村29号墓



河北灤河戦国墓葬

<壺A類の器形の変化> (図5)

これらの墓葬の変遷観をより妥当なものであると証明するために、上で編年した墓葬のうち、河北灤河戦国墓葬をのぞいて出土している、壺A類の器形と紋様の変化を以下で検討したい。壺A類は、分類において述べたように器体表面に幾何学紋や、虎や鳥、魚をあしらった紋様が施される壺である。

河北易県西貫城村13号墓から出土した壺A類は蓋部に1つの円形の鉢をもつ。圈足は低く、頸部も短い。

西貫城村13号墓より新しいと考えられる北京懷柔50号墓から出土した壺A類は蓋部に、外反した鉢を3つもつ。頸部は西貫城村13号墓の壺A類に比べて長くなっている。ただ、圈足はあるものの低い。この壺に似た形態の壺A類は、河北易県東沈村5号墓、また、河北易県解村2号墓出土の壺がある。

さらに、これらより新しい段階の壺A類と考えられる河北易県東斗城村29号墓出土の壺A類は、蓋部に鳥をあしらった3つの鉢が付く。また、頸部が前までのものと異なり、細長くなり胴部が丸みをもち、それと共に胴部の最大径が肩部に近い位置にくるようになる。この形態の壺に近いものとして、河北易県燕下都九女台墓区第16号墓出土の壺A類がある。この燕下都九女台墓区第16号墓には、付属する車馬坑がある。この車馬坑からは、尊が出土している（河北省文物研究所 1985a、河北省文物研究所 1996）。この尊は、i組や、郎井村10号1期にみられるような尊（図6-11）とは形態が異なり、郎井村10号3期に似た形態の尊がみられる（図4）。このため、九女台墓区第16号墓は、東斗城村29号墓より時期が遅れる可能性があるが、副葬陶器の形態から明確な時期差を導くのは難しく、その可能性を指摘するにとどめたい。また、九女台墓区第16号墓や東斗城村29号墓と北京懷柔50号墓の壺A類との中間的な形態をなす壺A類がある。北京懷柔56号墓からは、2点の壺A類が出土しているが、この壺A類は蓋部に鳥形の板状の鉢を持つ点、比較的長い頸部を持つ点などでは東斗城村29号墓の壺に類似するものの、頸部の太さが、東斗城村29号墓や九女台墓区第16号墓出土の壺A類ほど細くはなく、出土した壺A類2点のうち1点の壺は圈足も上述の墓の壺に比べて低い。これらのことから、懷柔56号墓出土の壺A類は北京懷柔50号墓出土の壺と河北易県東斗城村29号墓出土の壺の中間的な形態をなし、その時期も2つの墓葬の間であるといえる。

戦国期における燕の墓葬について

<壺 A 類の頸部から胴部にかけての紋様の分析> (図 5)

河北易県西賀城村13号墓から出土した壺 A 類は胴部には沈線によって紋様が描かれる。胴部は 2, 3 本の横沈線によって 3 段に区画される。頸部に近い 1 段目は鋸歯紋を縦に配置し、充填している。2 段目は内部が縦の鋸歯紋に充填される逆三角形紋を配列する。3 段目には虎形獸紋を描く。

次に、北京懷柔50号墓出土の壺はやはり胴部が 2, 3 本の横沈線によって 3 分割される。1 段目の紋様は鋸歯紋を縦向きに充填するもの。2 段目は S 字状の渦紋を二段にして充填するもの。3 段目は内部に鋸歯紋を縦向きに充填した三角形紋を逆三角形にして描くものである。西賀城村13号墓出土の壺 A 類と比較した場合、1 段目に鋸歯紋を縦向きにした紋様を描くことは共通している。一方、縦向きの鋸歯紋で充填した三角紋は頂点を対としてもう一列描くようになっている。また、縦向きの鋸歯紋と三角紋の間に S 字状の渦紋が新たにみられるようになっている。このことは、この段階になって、西賀城村13号墓段階の紋様構成をもとにしながら、描かれる紋様の範囲と種類が増えていくことを示すものと考えられる。そしてそれとともに、紋様の描かれる段の増加を指摘することができる。

このことは、器形の面で懷柔50号墓出土の壺 A 類と類似する河北易県東沈村 5 号墓出土の壺 A 類を分析したときに明らかになる。東沈村 5 号墓出土の壺 A 類は、2, 3 本の横沈線によって紋様の描かれる 6 つの段に分割され、頸部にも紋様が描かれる。そして頸部である 1 段目には虎形獸紋と S 字状の渦紋が描かれ、2 段目には三角形をモチーフとした紋様が描かれる。3 段目には西賀城村13号墓出土の壺などにおいて 1 段目に描かれていた縦向きの鋸歯紋が描かれる。4 段目には S 字状の紋様と三角形をモチーフにした紋様が描かれる。5 段目には懷柔50号墓の 3 段目に描かれた紋様と同一の紋様が描かれる。そして最下段である 6 段目には、虎と魚を描いており、縦向きの鋸歯紋を充填した三角形をモチーフにした紋様が描かれる段の下に虎などの紋様を描く点で西賀城村13号墓出土の壺 A 類と同じであるといえる。このようにみると、懷柔50号墓や東沈村 5 号墓出土の壺 A 類は西賀城村13号墓の壺 A 類の紋様帶原理を受け継ぎながら、頸部に虎などの動物を描くようになったり、新たな種類の幾何学紋を描く段数を増加させていることがわかる。

一方、懷柔50号墓や東沈村 5 号墓の壺 A 類と類似した形態をなす河北易県解村 2 号墓出土の壺 A 類は少し異なった様相をみせる。この壺は 2, 3 本の横沈線によって 6 段に区画された段は最上段と最下段に虎や鳥、魚などの動物紋を描くことは、これまで紋様を分析してきた壺 A 類と同様だが、動物紋を描く段にはさまれた 2 段目から 5 段目には、これまで分析してきた壺 A 類にみられた縦向きの鋸歯紋と縦向きの鋸歯紋を充填する三角紋は見られず、三角形や、渦紋や S 字紋など、これまで分析してきた壺 A 類にみられる基本的な幾何学紋を組合せて段の紋様が構成される。ただ、この壺は器形的に懷柔50号墓や東沈村 5 号墓の壺 A 類と同じであり、これらの壺との間に形態から時間差を設けるのは難しく、ほぼ同時期と見て、紋様の描かれる段の増加、そして紋様の種類の増加と共に、幾何学紋の配置が自由になってきたものと解釈したい。また、この解村 2 号墓出土の壺 A 類には頸部である 1 段目下部に動物紋と共に、渦紋によって描かれた火炎状の紋様が

描かれる。

このように、懷柔50号墓や東沈村5号墓を中心とする墓葬から出土する壺A類は、前段階の壺の紋様構成と紋様をもとにしながら、紋様の描かれる段を増加させ、紋様の種類も増加させた。その一方、この時期には頸部や最下段に動物紋が描かれ、その間の段に幾何学紋が描かれるものもあるが、同様の段構成をもちながら、上下の動物紋が描かれないものもあり、そのような壺は幾何学紋のみを描く。そしてその上下は空白のままである。

河北易県東斗城村29号墓出土の壺A類は、2、3本の横沈線によって大きく5つの段に区分されている。最上段である1段目には鹿を描いた動物紋が描かれ、また渦紋によって描かれる三角形の紋様がある。2段目から4段目には三角形をモチーフにした幾何学紋が描かれている。そして最下段には虎と魚を描く動物紋が描かれている。このように、おおまかな紋様の配置においては前段階で分析したような配置原理が受け継がれている。そして、頸部に位置する最上段に動物紋の他に渦紋によって描かれる三角形の紋様が存在することも共通している。

この渦紋によって描かれる三角形の紋様であるが、先に分析した河北易県解村2号墓出土の壺A類においても同様の位置にみられる紋様である。しかし、形態が大きく異なっている。解村2号墓出土の壺A類においては1本の渦紋から枝分かれをする蕨形の渦紋を組合せて三角形の火炎状の紋様を構成している。紋様全体を渦紋のみで構成するため全体的に丸みをもった紋様になっている。一方、東斗城村29号墓出土の壺A類においては渦紋を枝分かれさせず、渦紋を重ねて配置して外側の三角形になる部分は構成されている。一方、内側には渦紋ではなく三角形を重ねても重ねて紋様を構成している。そのため紋様全体としてみたとき、外形が直線的になっている。

器形の分析で、解村2号墓などと東斗城村29号墓と中間的な形態をもつと考えた北京懷柔56号墓の壺A類は、1点が同様の紋様をもっている。その紋様は外形を構成するのに渦紋を重ねているところなど、東斗城村29号墓と同様であるものの、東斗城村29号墓のように内側を直線的な三角形を重ねて構成するのではなく、渦紋で構成され、丸みを持っており、解村2号墓に近い。また、外形全体が丸みを持っている。

また、東斗城村29号墓に器形が近いとした河北易県燕下都九女台墓区第16号墓から出土した壺A類は刻紋ではなく、紋様が朱彩で描かれているものの、頸部に同様の紋様がみられる。これも東斗城村29号墓と同じく紋様の外形を渦紋で、内部に三角形を配置するという紋様構成をとる。そして、外形も直線的である。紋様を朱彩によって描くという違いはあるものの、東斗城村29号墓と同様の紋様構成であるとみてよいであろう。また、燕式鬲の変遷のところで取り上げた燕下都郎井村10号作坊遺址において、3期に編年されている瓦当にはこの紋様が描かれているものが存在する(図4)。その紋様はかなり直線的であり、瓦の使用期間の問題もあり、この瓦の初現年代は遡る可能性もあるものの、郎井村10号第2期に併行する東斗城村29号墓段階の相対年代比定の妥当性をさらに強めるものであるといえよう。また、燕下都内宮殿建築遺址からもこの紋様を施す瓦が多数みられる⁸(河北省文物研究所 1996)。このようにこの壺A類の頸部に施される渦紋によって構

戦国期における燕の墓葬について

成される紋様は、器形の変化と密接に対応することがわかる。

Ⅲ 相対編年と分期

これまで行ってきた分析の結果、戦国期を中心とする燕の墓葬はいくつかの時期に分けられることがわかった。これらをまとめると次のようになる（図6）。

第Ⅰ期

副葬陶器の基本的な組合せとして、鼎、豆、尊をもつ。組合せの分類では i - a 組である。これらの墓葬では鼎は A 類（1）と B 類（2, 3）である。尊は頸部が短く、胴部が比較的丸みを持つものもある。豆 A 類が見られ橢円形で坏部も比較的平坦である（4）。この形態は同時期のものと考えられる青銅製蓋豆とかなり類似しており、それを模倣したものと思われる。この蓋豆には坏部外面に鋸歯紋が施されることが多い。

また、河北易県西賁城村 8 号墓（河北省文物研究所 1996）は陶器の組合せとして i - a 組に属するが、鼎 C 類を副葬する。この鼎 C 類は次のⅡ期に多く見られる鼎である。また、尊の形態もⅡ期の墓葬に見られるものと類似する。これらのことからこの墓葬はⅡ期に近い時期のものと考えることができるだろう。

第Ⅱ期

第Ⅱ期は最も古い段階の壺 A 類を出土する河北易県西賁城村13号墓を代表とする。これまで分析してきたように、郎井村10号 1 期に属し、共伴関係が確実な鼎 C 類や尊の存在により、同一形態の尊と鼎 C 類を出土する西賁城村18号墓（河北省文物研究所）、河北易県 2 号墓（河北省文化局文物工作隊 1965d）もこの時期に含めたい。また、鼎 D 1 類（6）が出土した西賁城村14号墓に関しても、尊の形態が他の墓葬出土のものと同一形態であり、Ⅱ期に属するものと考えられる。

この時期における副葬陶器の器種の基本的な組合せは、鼎、蓋豆、壺、尊である。その他、盤、匜をセットで副葬する墓葬もみられるようになる。また、壺は B, C 類（8, 9）もみられる。これらの壺は紋様がほとんど施されないが、器形は壺 A 類と類似する。この時期の蓋豆は基本的に第Ⅰ期の蓋豆と変化がみられず、紋様でも坏部や蓋部に鋸歯紋を施すものが多い（7）。

第Ⅲ期

第Ⅲ期は、第Ⅱ期まで見られた尊が姿を消し、副葬陶器の基本的組合せは、鼎、蓋豆、壺（ii - b 組）である。北京懷柔50号墓、河北易県東沈村 5 号墓、解村 2 号墓をこの時期のものとしたい。この時期は壺 A 類の分析で述べたように壺 A 類は、その装飾性を増している。この時期の壺 A 類（18）は胴部下部に最大径をもち、頸部も太く短い。また、この時期の燕式鬲（21）はまだ、胴部や低部が丸く、タタキによる繩席紋の方向も口縁部側が縦方向で底部側が横方向である。鼎は東沈

石川 岳彦

第I期	鼎A 1	鼎B 2 3	蓋豆A 4				
				0 20cm			
第II期	鼎C 5	鼎D1 6	蓋C 7	壺C 8	壺B 9	壺A 10	尊 11
第III期	鼎D2 12	鼎D1 13 14	蓋豆B 15 16	壺A 17		壺A 18	壺A 19
	鼎D2 20	鼎D1 21	蓋豆B 22		壺A 23	壺A 24	壺A 25
第IV期	鼎D2 26	鼎D1 28 燕式鬲 29	蓋豆B 30	壺A 31		壺A 32	壺A 33
	鼎D2 27	鼎D1 29	蓋豆B 30	壺A 31		壺A 32	壺A 33
						壺A 34	壺A 35

戦国期における燕の墓葬について

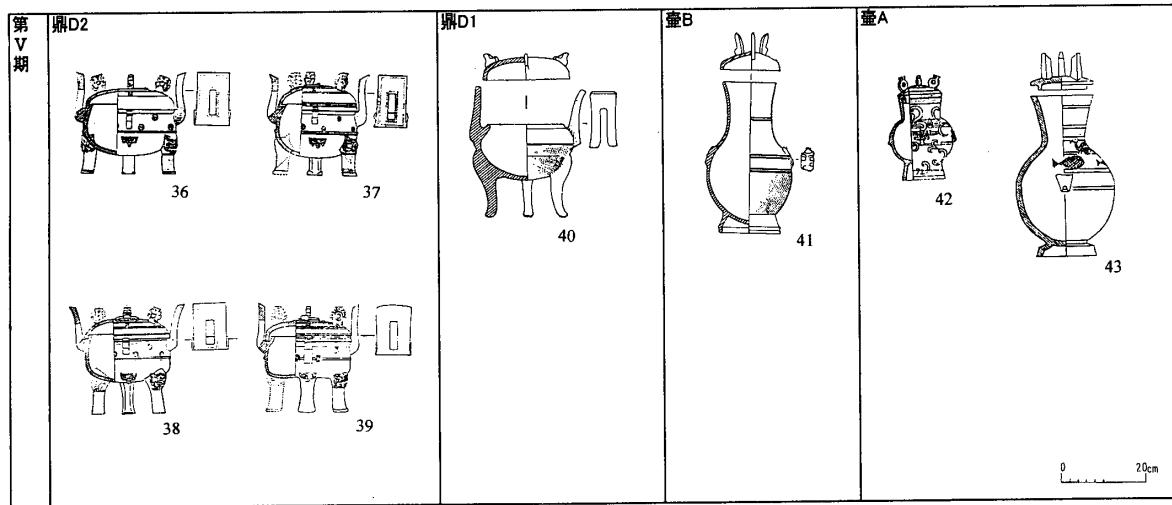


図6 副葬陶器の変遷図

(1・2・4：賈各庄M8, 3：賈各庄M32, 5・7・10：西貫城村M13, 6・8：西貫城村M14, 9・11：西貫城村M18, 12・16・19：解村M2, 13・15・18：東沈村M5, 14：懷柔M50, 17：大城子眉眼溝, 20・21・22・24・25：懷柔M56, 23：張貴庄M10, 26・28・31・34：東斗城村M29, 27・32・35：九女台墓区M16, 29・30・33：北淀M3, 36・37・38・39・42：辛庄頭墓区M30, 40・41：下花園区M2, 43：張貴庄M3)

村5号墓(13)や懷柔50号墓(14)のように鼎D1類がみられる。この時期の鼎D1類は胴部や蓋部が丸みを持っているのが特徴である。

また、解村2号墓がこの時期に属することは上述した通りである。解村2号墓は副葬陶器の組合せにおいてii-b-3組に属し、鼎D2類(12), 盖豆B類(16)を出土する。蓋などを出土し林巳奈夫氏が述べた、青銅礼器を模したいわゆる「復古形態」の副葬陶器を出土する墓である。この解村2号墓は九女台墓区第16号墓より明らかに早い時期のものであり、この時期には「復古形態」の副葬陶器が存在していたものと思われる。一方、解村2号墓では盤A類、匝B類、小口壺A類が出土し、それぞれ盤B類、匝B類、小口壺B類を出土する他のii-b-3組の墓葬とは異なっている。このことは盤B類、匝B類、小口壺B類がまだ、この時期に出現していなかったものと考えられる。そして、これまで一体で考えられてきた燕における「復古形態」の副葬陶器がある程度時間差を持ちながら出現してきた可能性を示すものである。

また、壺A類の分析から、この時期と河北易県東斗城村29号墓との中間的な形態を持つとされた懷柔56号墓であるが、この墓葬からは鼎D2類(20)が出土している。この鼎D2類は解村2号墓の鼎D類に比べて底部がやや平坦であるものの、円内に直線を引き、三角形を描く紋様などの点で類似しており、Ⅲ期でも後半の時期に当るものと思われる。

盖豆A類については、懷柔50号墓や、東沈村5号墓出土の盖豆(15)にみられるように、まだに坏部底面は平坦である。一方、上述したように、Ⅲ期でも後半期に属すると考えられる懷柔56号墓の盖豆A類(22)はそれまでの盖豆A類とは異なり、坏部と蓋部全体が丸みを持ってきている。

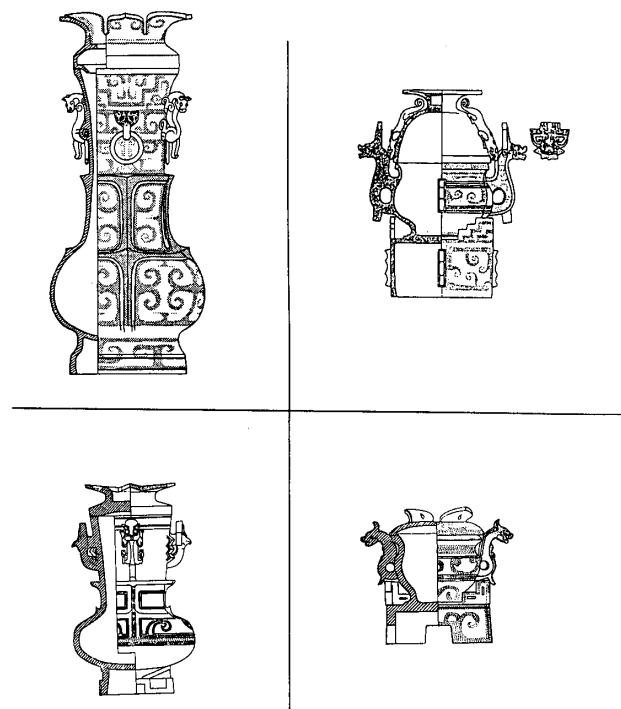


図7 九女台墓区16号墓（上段）と辛庄頭墓区30号墓（下段）出土の壺D（左）と蓋（右）の比較

り、鼎耳が上に長く伸びてきている（26, 27）。また燕下都九女台墓区29号墓出土の鼎（27）は腹部が下膨れ気味になる。

一方、河北北淀3号墓はii-b-2組に属し、鼎D1類（29）、蓋豆A類（30）、壺B類（33）が出土している。壺B類は器体表面に横沈線を施すのみである。また、蓋部には3つの上に高く伸びる把手をもつ。しかし高い圈足を持ち、細長く伸びた頸部、胴部の形態などは燕下都九女台墓区16号墓出土の壺A類（35）の器形に類似する。また、鼎D1類は紋様や装飾が華やかな鈕は持たないもの、長く屈曲する鼎耳をもつ。この鼎も燕下都九女台墓区16号墓出土の鼎のなかに外形が類似するものが存在する。また、蓋豆A類は、坏部と蓋部が丸みを持ち、坏部底面も丸みを持ち、深くなる。これは、Ⅲ期後半の北京懷柔56号墓と同様の形態であり、懷柔50号墓段階以前の蓋豆A類とは異なっている。これらのことから、北淀3号墓はⅣ期に属するものと考えることができるだろう。

以上のことから、東斗城村29号墓や燕下都九女台墓区第16号墓で出土したような「復古形態」の副葬陶器がみられる時期に、装飾を施さない副葬陶器を出土する北淀3号墓のような墓葬が存在したということができる。

第V期

第V期は河北灤河戦国墓と燕下都辛庄頭墓区第30号墓を指標とする。灤河戦国墓からは上述した

また、底部が深く丸みを帯びている。

河北張貴庄10号墓（天津市文化局考古発掘隊 1965）からは鼎D1類と壺B類（23）が類出土しているが、鼎D類は器全体が丸く、この時期に属す。また壺B類も胴部が円形ではないものの、頸部が短く、圈足も低い。よって、この時期に属するものと考えてもよいであろう。

第IV期

第IV期は河北易県東斗城村29号墓や河北易県燕下都第29号墓を指標とする。この時期の壺A類は上述したように、頸部が細く長くなり、胴部最大径もⅢ期より上方へ移っている。また、圈足も高くなっている。東斗城村29号墓や燕下都九女台墓区第16号墓から出土した鼎はD2類である。これらの鼎は河北易県解村2号墓出土の鼎D2類に比べて底部が平坦になってお

戦国期における燕の墓葬について

ように、燕式鬲が出土し、時期を考える上で非常に重要な遺物である。この燕式鬲の形態から、郎井村10号3期に併行することがわかる。また、この墓葬から出土した遺物の組合せはii-b-3組にあたる。豆は蓋豆A類が出土しているが、この蓋豆A類の形態は壺部と蓋部が丸みを帯びており、北京懷柔56号墓以後の蓋豆A類の形態をなしている。一方で、灤河戦国墓出土の簋は、IV期で見られたものに比べ、作りが雑になっており、これは時間的な変化を示すものとして注目される。そして、「復古形態」の陶器において同様の様相をしめすのが、辛庄頭墓区第30号墓から出土した副葬陶器である。

辛庄頭墓区第30号墓はii-b-3組に属し、「復古形態」の陶器を持つ。この陶器は装飾性が高いため、変化が捉えやすい。ここで、これらの陶器について、ii-b-3組に属する墓葬で時期の明らかな墓葬との比較を行いたい（図7）。燕下都九女台墓区16号墓は上述したように河北易県東斗城村29号墓とともに第IV期で、郎井村10号2期に併行すると思われる。この九女台墓区16号墓も「復古形態」の副葬陶器を出土している。壺D類は基本的な外形などで両者は一致する。

しかし、壺の上半部に付けられる獸形の装飾が、辛庄頭墓区第30号墓例は、九女台墓区第16号墓例に比べて明らかに雑になっており、九女台墓区第16号墓例で施されるような朱彩は施されていない。同様の傾向は、簋についても当てはまる。簋にも胴部に獸形装飾が付くものの、九女台墓区第16号墓例でみられるような写実性は、辛庄頭墓区第30号墓例では失われている。このように、辛庄頭墓区第30号墓出土の「復古形態」の副葬陶器は九女台墓区第16号墓に比べて雑で、写実性を失っている。このようなことは、郎井村10号3期の燕式鬲を共伴した灤河戦国墓の副葬陶器の状況と一致しているということを改めて確認できる。そして、このような事実から辛庄頭墓区第30号墓が九女台墓区第16号墓に時期的に遅れることを示すといえるであろう。また、辛庄頭墓区第30号墓出土の壺A類に関しても紋様がそれまでの基調となっていた幾何学紋やその配置原理を完全に失い、胴部全面にわたってJ字形の蔓状の紋様が施されている（図6-42）。このような事実も時期差を示す根拠となり得るのではないであろうか。

また、この墓葬で出土する鼎D2類は前時期に比べ、足部の高いものが存在し、底部が完全に平坦になっているものも存在する（図6-38,39）。

天津張貴庄3号墓（天津市文化局考古発掘隊 1965）では鼎D1類と壺A類（図6-43）が出土している。壺A類は胴部がほぼ球体化している。また、紋様として魚と鳥が描かれるが、ただそれのみが描かれ、第IV期までの紋様配置原理が崩れている。そのためこの時期に属するものと思われる。また、鼎D1類は胴部が平べったくなり、耳が長く、足部も高い。河北张家口市下花園区2号墓（张家口市文管所・下花園区文教局 1988）でも耳部が長く、足部の高い鼎D1類（図6-40）が出土している。この墓葬からはまた、壺B類が出土し、圈足が比較的高く、胴部も球形に近い（図6-41）。よって、この墓葬もこの時期に属するものと考えられる。

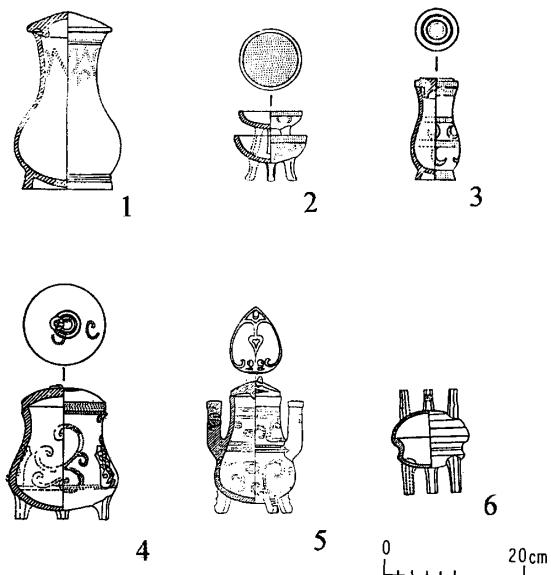


図8 辛庄頭墓区30号墓出土の特殊な副葬陶器

出土したことをあげている（河北省文物研究所 1996）。ちなみに燕下都虚粮冢墓区第8号墓は激しい盗掘を受け、いくつかの玉器や車馬具などしか残っておらず、年代を推定できる遺物は全くないといつていいほどである。

ところで、燕下都辛庄頭墓区第30号墓に関しては、志賀和子氏による金銀器の研究がある（志賀 1996）。志賀氏は、洛陽金村の戦国時代のものとされてきた金銀器（梅原 1944）の分析を行うなかで、この燕下都辛庄頭墓区第30号墓についても分析している。志賀氏はこれまで戦国期のものとされてきた金銀器に関して、その時期が前漢代にまで下るもののが存在することを指摘し、そして戦国期的な金銀器が前漢前期に存在することを、統一事業を遂行した秦に対する反動として捉えている。

そして、志賀氏はこれらの金銀器の年代を考える基準として、燕下都辛庄頭墓区第30号墓出土の金製飾金具と寧夏同心県倒墩子5号墓（寧夏回族自治区博物館他 1987、寧夏文物考古研究所他 1988）出土の青銅製飾金具を比較している。志賀氏は燕下都辛庄頭墓区第30号墓出土の金製飾金具に描かれた紋様と、倒墩子5号墓出土の青銅製飾金具の紋様が類似するとする。なお、倒墩子5号墓では五銖錢が共伴しており、報告者はその年代を前漢中後期としている。一方、志賀氏は倒墩子5号墓の年代を前漢中期と考えており、燕下都辛庄頭墓区第30号墓出土の金製飾金具についても、金製と青銅製の違いがあり、燕下都辛庄頭墓区第30号墓出土の金製飾金具のほうが時期的に早い可能性があるとしながらも、その年代については前漢代におさまるものであろうとしている。

それでは、副葬陶器はどのような様相を見せるのか。燕下都辛庄頭墓区第30号墓出土の副葬陶器から分析を行いたい。燕下都辛庄頭墓区第30号墓は、上述したように「復古形態」の陶器をもち、組み合わせでは ii - b - 3 組に属する。この墓葬からは鼎、壺などの他、盤、匝、簋、鑑などが

iv 燕的な「復古形態」副葬陶器の下限年代について

上述のように燕における副葬陶器の編年が示されたが、燕における最終段階の墓葬の下限について考えたい。ここでは第V期に位置付けられた河北易県燕下都辛庄頭墓区第30号墓について検討してみたい。

この辛庄頭墓区第30号墓は、石永士氏によって燕下都内に存在する大型墓葬であるとして紹介され、その時期は戦国晚期の墓葬であるとされた（石永士 1995）。この年代観は『燕下都』でも引き継がれている。そして、『燕下都』では年代決定の根拠の一つに、辛庄頭墓区第30号墓から出土した玉器と類似するものを副葬する河北易県燕下都虚粮冢墓区第8号墓の封土内から、戦国晚期に鋳造された明刀錢が

戦国期における燕の墓葬について

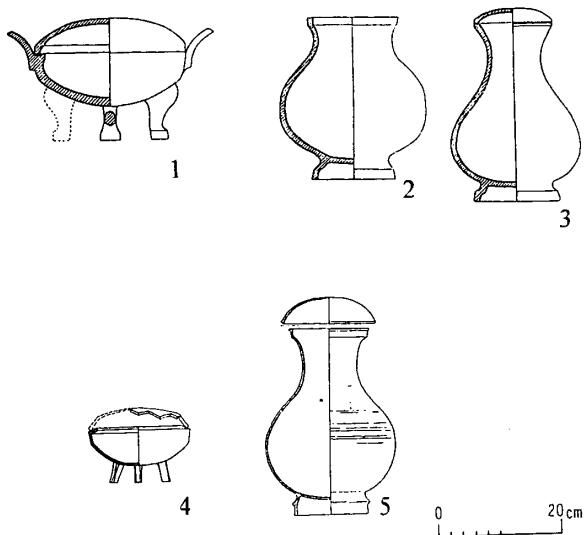


図9 東沈村33号墓出土の陶器（1－3）と
北京懷柔55号墓出土の陶器（4－5）

壺がある（図8－1）。この壺は、圈足を持ち、胴部の最大径は下半部で、胴部形態は下膨れである。

このように、燕下都辛庄頭墓区第30号墓は、副葬品の組合せにおいてii-b-3組に属するのであるが、副葬陶器の内容は大きく二つの要素に分けることが可能である。

一つは、燕下都九女台墓区16号墓に代表されるような、林巳奈夫氏が指摘したいわゆる「復古形態」の副葬陶器、そして鼎D2類や壺A類また、盤や匜などの燕の戦国墓でみられる一般的な副葬陶器である。

そしてもう一つの種類の副葬陶器は、図8に示したような獸の顔面を描いた蓋部をもつ壺形の陶器や三足をもつ把手付きの陶器（図8－5）、そして、蓋に把手が無い下膨れの形態をなす壺（図8－1）などである。そして、この墓葬では、それまでの墓葬でみられ、灤河戦国墓においてもみられた蓋豆が存在しないことも大きな特徴である。燕下都辛庄頭墓区第30号墓が志賀氏の指摘のように漢代にまで時期的に下るのかどうかを副葬陶器から考察するために、燕の地域の漢代墓葬を分析したい。

燕が存在していた河北省北部や北京市では、漢代の墓葬として非常に大型の墓葬が存在する。その代表的なものは、河北省満城県にある満城漢墓（中国社会科学院考古研究所他 1980）であり、北京市にある大葆台漢墓（大葆台漢墓発掘組他 1989）である。しかし、満城漢墓1号墓は銅器に記された銘文から中山靖王劉勝の墓であることが明らかであり、その年代は紀元前2世紀末から紀元前1世紀初めの前漢中期であり、大葆台漢墓もその年代は前漢中期にまで下ってしまう。一方で現在まで、この地域において紀元前3世紀末から紀元前2世紀前半くらいの時期、つまり前漢前期にあたる大型墓葬の様相は明らかではない。しかし、その一方でこの時期の中、小型墓葬はいくつか調査されている。

出土している。これらの「復古形態」の副葬陶器も第IV期までに比べて装飾が退化しているということは先に述べた。

一方、この墓葬には、前時期までの墓葬にみられなかった、副葬陶器も存在する（図8）。このような器種はこれまでの調査で出土例が無く、現在のところどのような系統に属するのか、また、いかなる青銅器を模倣したものなのかも不明である⁹⁾。類例を待ちたい。例としては、報告では鼎として報告されているが、胴部に棒状の三足をもち、また、蓋部にも三足と同様な棒状の突起を持つ陶器が存在する（図8－6）。また、他にも蓋部にも把手を持たない壺A類とは異なる種類の

石川 岳彦

河北省易県燕下都では、いくつかの前漢墓及び秦墓が調査されている。このうち、秦墓はほとんど副葬陶器が無く、その様相は不明瞭である。一方、前漢早期墓として報告されている墓葬が5基報告されている（河北省文化局文物工作隊 1965c）。墓葬の位置は燕下都東城東南部に位置する東沈村の東、250m 附近であるという（図2）。これらはすべて竪穴土壙墓である。これらの墓葬からは鼎、壺、碗、罐、尊、瓮、人物俑、馬俑などが出土した。

このような器種組合せや陶器の形態は、これまで分析してきた戦国墓とは完全に異なっており、時期が前漢代にまで下るものである。各墓葬の出土点数、出土器種は不明である。このうち東沈村33号墓からは報告によれば、鼎、壺、碗、人物俑、馬俑などが出土した（図9-1-3）。

このうち、鼎は胴体部が扁平な形状に近く、また耳部は大きく外へ反る形状をなす（図9-1）。このような形態の鼎は典型的な秦代から漢代前期の形態の鼎である。また、壺は、朱彩により紋様が描かれていたようであるが、残存していないとされる。圈足をもち、胴部の最大径は下部にあり、全体的に下膨れの形状をなす（図9-3）。

また、蓋には把手が付いてはいない。報告者はこれらの墓葬から五銖錢が出土せず、半両錢が出土することを根拠に前漢早期の年代を与えていているようだが、陶器の形態からもその年代比定は妥当なものであると思われる。

また、上述したように満城漢墓1号墓は前漢中期に属することが確実な墓葬であるが（中国社会科学院考古研究所他 1980）、ここからも大量の副葬陶器が出土しており、その中には同様の壺が見られる。また、同様の壺は遼寧省尹家村漢代文化層にもみられる（中朝合同考古学発掘隊 1965、中国社会科学院考古研究所 1996）。燕下都辛庄頭墓区30号墓から出土した壺は外形がこの東沈村33号墓出土の壺に類似している。

また、北京市懷柔では、50号墓や56号墓といった戦国墓の他に、前漢墓として報告されているものがある（北京市文物工作隊 1962）。このうち、懷柔55号墓（図9-4-5）からは、棒状の足をもつ鼎が存在する（図9-4）。蓋は把手がつかない形態である。この鼎は、蓋部に把手が付かないものの、燕下都辛庄頭墓区第30号墓における棒状の3本の把手がつく鼎として報告されている陶器と足部などが類似する。この墓葬は報告では前漢中期として報告されている。このように、辛庄頭第30号墓から出土した遺物の中には漢代にまで下る時期の遺物に近い様相を示すことがわかる。

一方、洛陽中州路においても、東沈村33号墓や、懷柔55号墓と同様の器種の組合せがみられる（中国科学院考古研究所 1959）。このような墓葬は、器種組合せが鼎、盒、壺であり、報告において洛陽中州路第7期に併行するものとされ、戦国後期のものとされている。飯島武次氏は、上述した満城漢墓1号墓（中国社会科学院考古研究所他 1980）や、湖南省長沙馬王堆漢墓における陶器や漆器から大量の盒が出土していることを指摘して、この洛陽中州路7期が紀元前3世紀後半、しかもその時期を戦国末期とし、「漢代にかなり近い時期」であるとしている（飯島 1998）。

以上まとめると、燕下都辛庄頭墓区第30号墓では、燕下都九女台墓区第16号墓の時期にみられた器種以外に新しい副葬陶器群が存在する。また、燕の戦国墓において基本的構成器種であった蓋豆

戦国期における燕の墓葬について

表2 燕墓編年試図表

	a	b-1	b-2	b-3	
B.C.500	I 賈各庄 M 8 賈各庄 M32				
B.C.400	II 西貴城村 M13 西貴城村 M 8 西貴城村 M14 賈各庄 M16		西貴城村 M18 易県 M 2		郎井村10号作坊遺址第1期
B.C.300	III 張貴庄 M10		東沈村 M 5 懷柔 M50 懷柔 M56	解村 M 2	郎井村10号作坊遺址第2期
B.C.200	IV 張貴庄 M 3		北淀 M 3	東斗城村 M29	郎井村10号作坊遺址第3期
B.C.100	V 張貴庄 M 3		下花園区 M 2	河北灤河戰國墓 辛庄頭墓区 M30	
満城漢墓 M 1 中山王劉勝墓（在位 B.C.154 – B.C.113）					

が姿を消している。そして、この墓葬で新たにあらわされた副葬陶器の中には、壺などのように漢代にまで時期的にくだりうる可能性のある副葬陶器が存在していることがわかった。ただ、副葬陶器における類例が少ないため、ここでは可能性を示すにとどめたい。

v 各時期の絶対年代（表2）

第Ⅰ期の絶対年代は、尊の形態で類似する河北唐山賈各庄18号墓の青銅器から、洛陽中州路第3期に併行することがわかる。中州路第3期の年代は、現在、紀元前6世紀後半から、紀元前5世紀初めとかんがえられ、各研究者の間でもほぼ一致している（高明 1981, 林 1989, 宮本 1991, 陳光 1997, 1998）。よって、第Ⅰ期の年代は紀元前6世紀後半から、紀元前5世紀はじめとしたい。

第Ⅱ期の絶対年代は、上述したように賈各庄16号墓、および、河北易県西貴城村14号墓から出土した青銅器によって決定することができる。これらの青銅器は洛陽中州路第3期よりおくれ、洛陽中州路第4期を含む。洛陽中州路第4期は紀元前5世紀後半とされている。よって、第Ⅱ期の絶対年代は紀元前5世紀中葉から紀元前5世紀後半の時期を考えたい。

第Ⅲ期、第Ⅳ期に関してであるが、河北易県解村2号墓や、北京懷柔56号墓唐出土した鼎D2類（6-12, 20）に施された円の内部中心を通じて直線で分割し、扇形を描く紋様を施す青銅鼎が、遼寧式銅劍を副葬する墓葬である、遼寧凌源三官甸（遼寧省博物館 1985）から出土している。この青銅鼎の形態は洛陽中州路第4期の鼎より全体的に丸みをおび、むしろ中山王譽墓出土の青銅器（図16-2）に近い。よって、洛陽中州路第4期より遅れるものと考えられる。また三官甸からは中原式の青銅戈が出土している。報告ではこの銅戈の形態が燕の成候（紀元前358年～紀元前330年）に比定されている、燕候庫戈に類似するとしている。上述したように、懷柔56号墓は第Ⅲ期と第Ⅳ期の中間的な様相を示すことを考えた場合、第Ⅲ期と第Ⅳ期との画期は、ほぼ紀元前4世紀後半前葉と考えてよいであろう。よって第Ⅲ期は、紀元前4世紀前半から紀元前4世紀後半前葉の年代を

表3 戦国燕墓葬規模

	墓壙	墓壙の寸法（縦×横×高さ $\pm\%$ ）	埋葬施設
	槨	槨	
賈各庄 M 8	3.35×2.74×2.7	2.1×1.4×0.55	①
賈各庄 M32	2.95×1.8×1.59	2.2×0.94×0.45	①
西貫城村 M 8	2.5×1.30×1.20		①
西貫城村 M13	2.30×1.15×0.75		
西貫城村 M18	3.15×210	2.90×1.48-1.61	2.10×0.83-1.00
易県 M 2	3.9×2.8		
賈各庄 M16	2.94×1.54×2.2	2.06×0.56×0.45	①
西貫城村 M14	3.5 \pm 以上×2.00-2.25		
賈各庄 M31	2×1.2×0.55	1.26×0.59×0.3	①
瀋陽市南市区			
喀左大城子 M 1	3.25×1.75	2.2×1.1-1.5×1.1 あり	②
東沈村 M 5	3.40×2.20×3.04	2.55×1.00×0.77 1.78×0.62×0.46	②
懷柔 M50	3.8×2.46×5.31	2.32×1.48-1.50 外棺：1.70×0.90-1.08、内棺：1.50×0.74-0.82	③
下花園区 M 1		2.9×1.45 2.16×0.56	②
下花園区 M 2			
下花園区 M 3			
三 石			
懷柔 M56	3.4×3.3×7	外槨：2.9×1.8、内槨：2.24×0.9 1.88×0.64	③
北淀 M 3	3.40×2.50×2.60	2.80×1.50×1.00 2.00×0.95	②
解村 M2	7.00×5.50×2.10	4.10×2.58-2.70×1.00 2.40×1.36×0.60	②
九女台墓区 M16	10.4×7.7×7.6		
東斗城村 M29	□：4.54×3.02、底：3.26×2.42×4.9		
昌平松園 M 1	□：5×3、底：4.2×2.2		
張貴庄 M10	3.1×2.13×1.18		
張貴庄 M3	3.6×1.9×1.2	葬具：2.18×0.94×0.54	①
辛庄頭墓区 M30	13.5×10.5		①
賈各庄 M23	3.16×2.1×1.59		①
昌平松園 M2	□：5.6×3.7、底：4.9×3 あり	2.56×1×0.5 あり	②
東斗城村 M31	2.96×2.66×1.2 1.74		①
賈各庄 M18	5×4.2×1.44 3.3×2.35×0.24		①
賈各庄 M28	3.8×3.1×1.26 2.94×2×0.76		①

埋葬施設：①－槨、または棺のみもつ

：②－槨と棺をもつ

：③－内外棺または槨をもつ

戦国期における燕の墓葬について

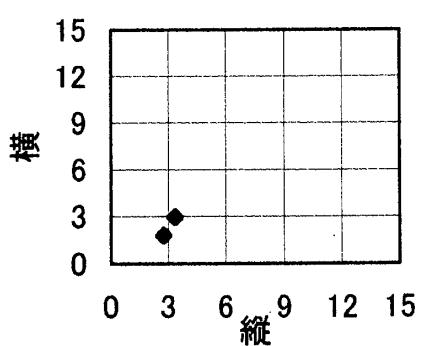


図10 i - a 組墓葬規模グラフ
(数値単位 : m)

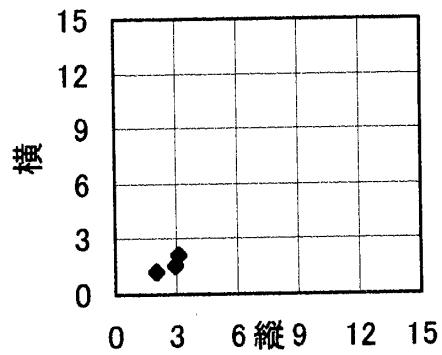


図13 ii - b - 1 組墓葬規模グラフ
(数値単位 : m)

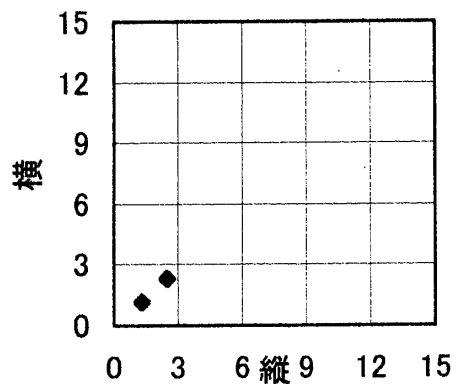


図11 i - b - 1 組墓葬規模グラフ
(数値単位 : m)

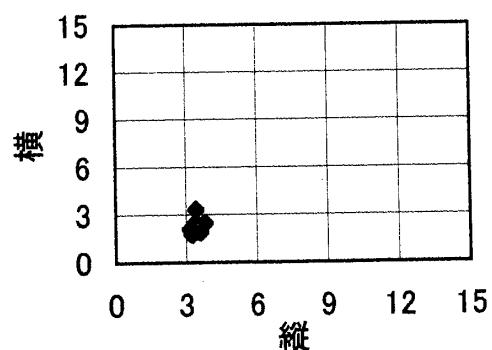


図14 ii - b - 2 組墓葬規模グラフ
(数値単位 : m)

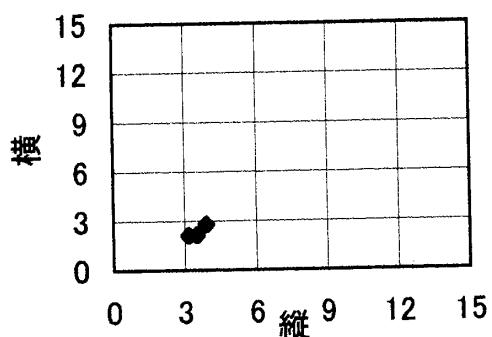


図12 i - b - 2 組墓葬規模グラフ
(数値単位 : m)

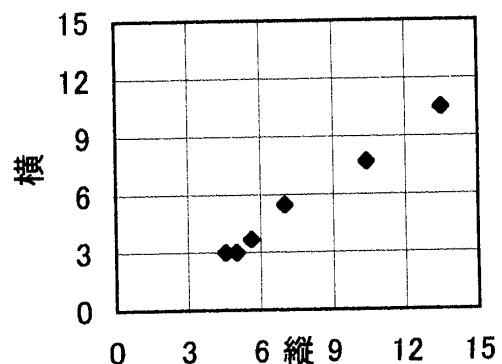


図15 ii - b - 2 組墓葬規模グラフ
(数値単位 : m)

考えることができる。

一方、第Ⅳ期に属する河北易県燕下都九女台墓区第16号墓に関して、これまで、宮本一夫氏や、陳光氏は出土した鼎D2類の側視観が中山王罍墓（紀元前310年前後埋葬）の青銅鼎（図16-2）の側視観との類似から紀元前300年前後の時期を考えてきた（宮本 1991, 陳光 1997, 1998, 宮本 2000）。陶器の鼎と青銅鼎を直接比較することには問題が存在すると思われる。しかし、上述のように、第Ⅲ期と第Ⅳ期との画期が紀元前4世紀後半前葉に求められたことにより、宮本氏や陳光氏による年代比定はほぼ妥当なものであると考えられよう。よって、第Ⅳ期は、紀元前300年をはさむ時期であると考えられ、紀元前4世紀後半後葉から紀元前3世紀前半の時期を考えたい。

第Ⅴ期は、おおよそ紀元前3世紀後半の時期であると考えられる。また、上述したように燕下都辛庄頭墓区第30号墓は、その時期が漢代にまでくだる可能性があり、その下限年代は紀元前2世紀はじめ頃まで下がる可能性がある。今後の資料の増加を待ちたい。

(3) 副葬陶器の器種組合せと階層差

i 燕における副葬陶器組合せについて

上述したように、各墓葬について編年作業をおこなうことができた。一方、先に、燕の副葬陶器に関してその組合せの分類を行ったが、尊や壺の有無など、その組合せが時期差である場合も存在したが、時期差とは考えられない場合も存在することがわかる。ここでは、副葬陶器の組合せをその出土点数や、墓葬施設との関係から分析していきたい。

ii 墓葬規模の比較（表3）

上にあげた墓葬に関して、それぞれの組合せごとに墓壙の墓底の長辺と短辺の長さを、それぞれ抽出した。そして墓葬の施設に関しては、報告された棺、槨の有無を分析した。i-b-1組（図11）とi-b-2組（図12）は第Ⅱ期に属する。これらの墓葬は墓葬例が少数であるが、i-b-1組よりi-b-2組のほうが大型であることがわかる。墓葬の施設はi-b-2組である河北易県西賀城村18号墓のみ報告があり、それは棺のみではなく、棺と槨をもつ墓葬である。よって、同時期に存在したi-b-2組とi-b-1組は階層差であり、i-b-2組がより上位であるといえよう。

では、尊をもたないii組の各種墓葬に関してはどうであろうか。このグループに属する墓葬は、第Ⅲ期から第Ⅴ期にかけてみられ、尊、蓋豆、壺という基本的組合せは、このなかで最新段階にあると考えられ、蓋豆がみられない河北易県燕下都辛庄頭墓区第30号墓をのぞいて同一である。よって、器種組合せにおいては、時期差を無視することが可能であると思われ、大きく一つの時期と考えて分析したい。そして、ii-b-1, 2, 3それぞれの組に関して、上述のように墓葬規模をグラフ化するとそれぞれ図13, 14, 15のようになる。これら3のグループを比較すると、1組から

戦国期における燕の墓葬について

2組、3組と漸進的に墓葬規模が大型化する傾向が明瞭である。また、墓葬施設の面でも1組で墓葬施設が明らかな墓葬は、すべて棺のみを持つものである。そして、2組では棺と槨をもち、このうち河北易県東沈村5号墓、北京懷柔56号墓は内外棺または槨を持つ。3組も墓葬施設は棺と槨を持ち、河北易県解村2号墓や河北易県燕下都九女台墓区16号墓は内外棺または槨を持つ。特に、2組のなかで唯一、鼎D2類を持つ懷柔56号墓は、墓群を形成する懷柔の戦国墓のなかで、他の墓葬とは異なり、唯一、内外棺・槨を持つ墓葬であり、墓群内での階層差を示す例であるといえる。しかし、鼎が1点であることなどそれは隔絶した差異であるとはいえない。墓葬施設という視点だけでは2組と大きく異なるように思われるものの、墓葬規模の面においては2組と3組の間に大きな隔絶があり、3組のほうが大型であるのは一目瞭然である。このうち九女台墓区第16号墓や辛庄頭墓区第30号墓は、燕下都内に墓群を形成し、大型の封土をもっている。このようにii-b-1, 2, 3組についても、1, 2, 3組の間に階層差を認めうることがわかる。そして、1, 2, 3組の順で段階的により上位者の墓葬であることがいえるであろう。

なお、墓葬における階級差を論じる際には被葬者の性別も考慮に入れる必要がある。これまで報告された燕の墓葬に関する報告の中で、被葬者の性別が明らかになっている例はほとんど無い。これまでにそれが明らかになっている墓葬は遼寧喀左大城子1号墓のみである。この墓葬の副葬陶器の組合せはii-b-2組である。この墓葬の被葬者は女性であるとされている。よって、これまでみてきた燕的な陶器副葬墓に葬られる人物が男性だけであるということはないことがわかる。しかし、男女の同定が、燕における陶器副葬墓の階層差の問題を考え、明らかにしていくためにはこれから必要になってくることはいうまでもない。

iii 副葬陶器の数の問題

中国における西周期から戦国期にかけて、副葬品の数の問題について愈偉超氏の論文がある（愈偉超1985）。愈偉超氏は文献に記された鼎を中心とする副葬品点数の記載を参考にしながら、墓葬出土の鼎の点数をもとにして、西周期から戦国期にかけての身分秩序の変化を考察した。そのなかで、愈偉超氏は礼制をもとに天子のみに認められている鼎を9点副葬できるということが春秋期に各諸侯がそれを行うようになること、そして、西周期よりのち、鼎を副葬する墓葬の数の増加にあらわれた富裕な一般民の増加などを指摘し、また、戦国期に副葬品にあらわれたこのような周的な秩序を崩壊させた秦の役割を論じている。愈偉超氏は文献の記載にあらわれた周的な基本的礼制を示す鼎と簋の数に関して、9鼎8簋、7鼎6簋、5鼎4簋、そして3鼎2簋、2鼎1簋、1鼎1簋などの規制の存在を指摘する。

このように、愈偉超氏によってなされた研究は中国国内全体の墓葬を一括で扱っており、とくに各地に国が乱立した春秋戦国期の各国ごとの詳細な研究はこれまでなされていない。燕の墓葬に関しては上述したように、副葬陶器の組合せが墓葬の規模や施設に緊密な相互関係があることがわかり、階層差として抽出できるものと考えられた。ここで、副葬陶器の数の面についても検討したい

(表1参照)。

i - b - 1組とi - b - 2組はすべて鼎が1点または2点である。そして、2組についてはずべて鼎が2点である。このように、盤、匝の有無のみならず、鼎の数の面でも階層差があらわれているようにみえる。ちなみに、河北易県西貫城村13号墓は青銅鼎が出土しており、陶器の鼎とあわせると鼎が2点になる。この墓葬は青銅器副葬という古い様相を見せている墓葬であると考えることもでき、異なった様相を示すものであるといえる。

ii - b - 1, 2, 3組についてであるが、ii - b - 1組は基本的に鼎が1点である。この組合せのグループの中で唯一、鼎を2点副葬する河北唐山賈各庄16号墓は、第Ⅱ期に編年され、青銅敦が出土しており、異なった様相を示している。2組は鼎を1点副葬する墓葬の他に、東沈村5号墓のように3点や2点の鼎を副葬する墓葬がみられる。

ii - b - 3組では鼎は3点以上である。他の器種についても他の組合せのグループに比べ出土点数が多いことがわかる。このグループは副葬陶器に「復古形態」の陶器を持つことが特徴であるが、このうち、出土点数が鼎の数に連動していると考えられるのが蓋である。3鼎墓である河北易県東斗城村29号墓からは蓋が出土していない。河北易県解村2号墓からは鼎が8点出土しているが、このうち升鼎が6点である。この墓葬からは蓋が6点出土している。この墓葬は盗掘を受けており、副葬品がさらに存在した可能性もある。また、河北易県燕下都辛庄頭墓区第30号墓でも、鼎は10点出土しているものの、升鼎が7点出土し、蓋は6点出土している。そして、燕下都九女台墓区第16号墓からは升鼎が9点出土し、蓋が12点出土している。これら3つの墓葬は、墓道を持つ(九女台墓区第16号墓は坑道と報告されている)。このうち、辛庄頭墓区第30号墓と九女台墓区第16号墓ではさらに方鼎や鑑や甬鐘といった器種が存在する。これらの器種は解村2号墓では存在しない。このことは、辛庄頭墓区第30号墓や九女台墓区第16号墓が解村2号墓にくらべてより上位に位置付けられる可能性をしめすものといえる。ちなみに、墓道を含めた墓葬の形態が解村2号墓が甲字形であるのに対し、辛庄頭墓区第30号墓や九女台墓区第16号墓はより上位に位置付けられる中字形である。また、上述したように、この二つの墓葬は燕下都内に墓群を形成して存在し、大型封土墳である。そして、最上位に位置付けられる9鼎墓であることは九女台墓区第16号墓が燕王墓であるとする説の根拠にもなっている。

このように、ii - b - 3組に属する墓葬は、副葬陶器のなかに「復古形態」の陶器を含み、それが、ある一定以上の階層によって保有される性格のものであったことがわかったのであるが、その中でも、蓋が存在する墓葬は鼎が8点以上(升鼎が6点)以上出土する墓葬である。また、方鼎や甬鐘、鑑といった器種が存在するのは極少数の墓葬に限られ、そのような墓葬は副葬陶器という面だけではなく、墓葬自体の構造でも大きな相違点を持つ墓葬である。

このように、燕における副葬陶器の組合せの差異が階層の差異ということによるものであることが明らかにされた。そして、編年によって明らかにされたように、これまである一時期を画するものと捉えられてきた燕の「復古形態」の副葬陶器が解村2号墓のように鼎、蓋豆、壺という戦国的

戦国期における燕の墓葬について

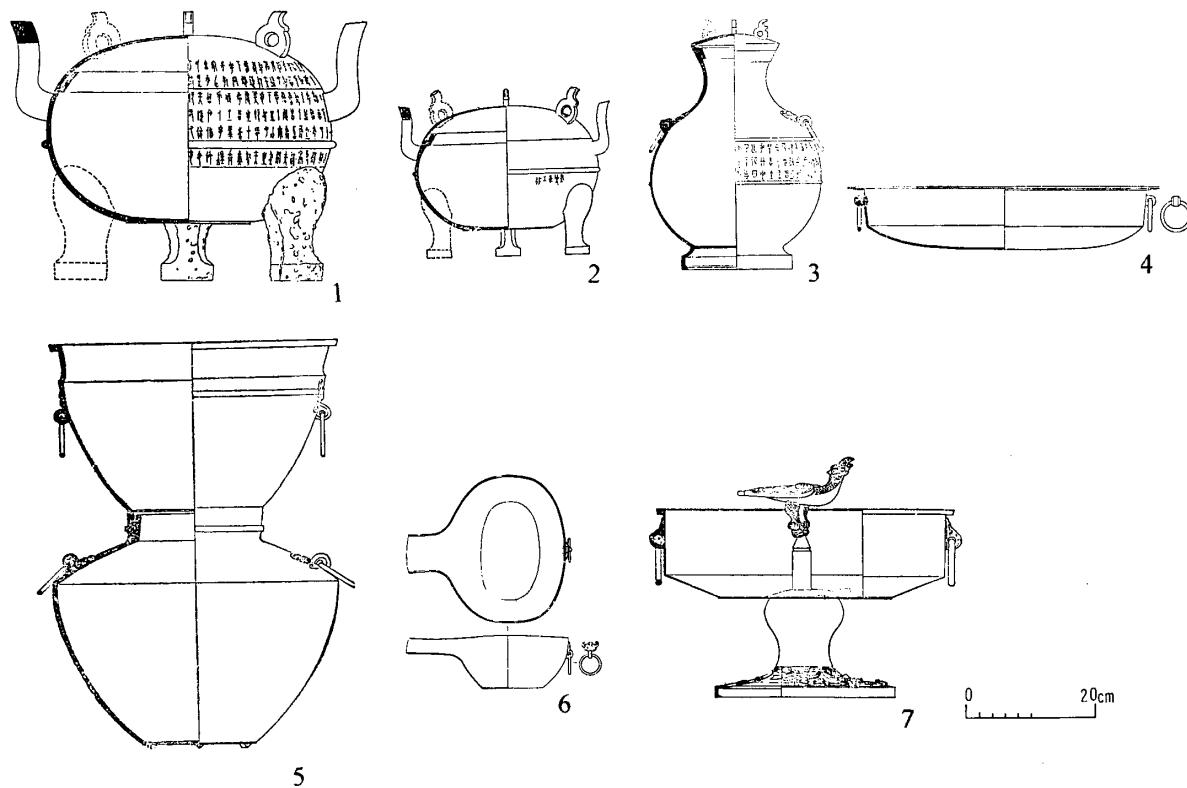


図16 中山国王畧墓出土青銅器

(1 鉄足銅鼎, 2 銅鼎, 3 銅壺, 4 銅盤, 5 銅缶, 6 銅匜, 7 銅鳥柱盆)

副葬陶器の組合せの特徴を確立させた第Ⅲ期から登場し、それがある一定以上の階層の墓葬に独占されていることが明らかになった。

IV 燕の墓葬と他の国の墓葬との比較

1 中山国との比較

これまで、燕の副葬陶器の編年を行い、それにあらわれた階層差の問題の検討を行ってきた。これまで他の戦国諸国に関してもその墓葬や副葬陶器に関してこれまで多くの研究がなされてきている¹⁰⁾。ここでは、燕のすぐ南西に隣接していた中山国の墓葬の様相を比較検討したい。

中山国に関しては、1995年にその王墓である河北平山県に存在する畧墓の正式報告が公表され、王墓とともにその周囲から夫人墓とされる陪葬墓の報告もなされている（河北省文物研究所1995）。これらの墓葬は畧墓の年代が鼎に刻された銘文により紀元前300年頃であることが明らかであり、当然その周囲に存在した陪葬墓もその年代に大差ないものと考えられる。よって、これらの墓葬及び、出土品はかなり確実な実年代をもって検討しうる重要な資料であるといえる。また、畧墓に隣接し、中山国の国都靈寿であると考えられる平山三汲古城の調査によって、中小墓が数多く調査され、報告もなされている（河北省文物研究所 1987b）。ここではそれらを分析し、燕との比較をおこないたい。

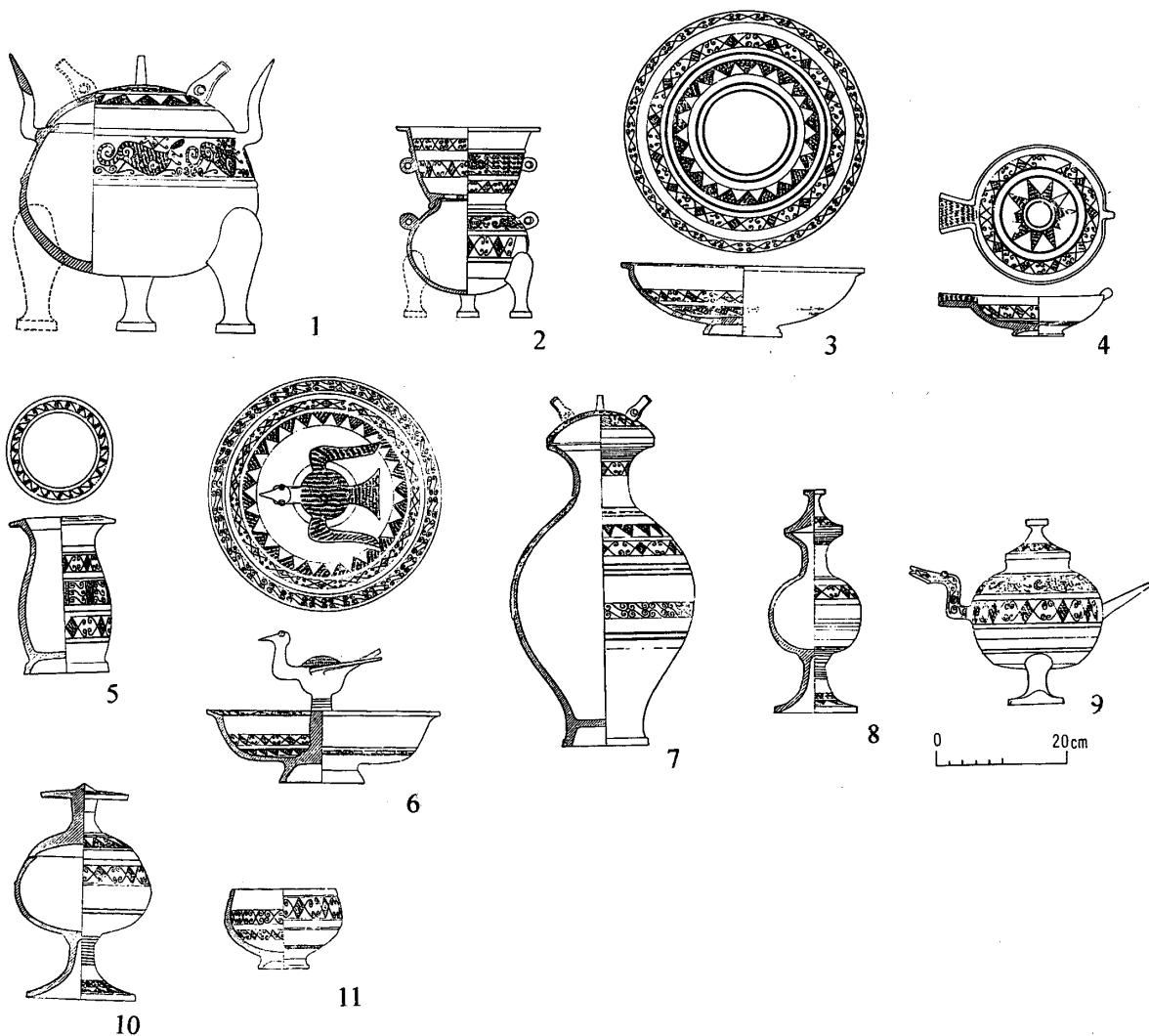


図17 中山国王畧墓出土陶器

(1 鼎, 2 甗, 3 盤, 4 匝, 5 筒型器, 6 鳥柱盆, 7 壺, 8 球腹壺, 9 鴨形尊, 10 豆, 11 碗)

2 中山国の墓葬について

中山国は、文献によれば北方に居住していた白狄や鮮虞という名で文献にみえる民族が河北省南部に建国した国であるとされる。その領域はいわゆる燕も含めた「戦国の七雄」と呼ばれる国々に比べれば狭く、河北省南部、しかも三汲古城や畧墓の存在する平山県一帯であったと考えられる。そして、紀元前406年に一度、魏によって滅亡した。しかし、その後紀元前378年に再建したが、紀元前296年に燕と趙に攻められて滅亡したとされている（白寿彝編 1994）。

中山国は文献には北方民族が建国した国家であるとされているが、考古学資料によっても、そのことは濃厚に確認することができる。

河北新樂中同村2号墓からは甗や鼎、壺、蓋豆など中原諸国に見られるような形態の青銅器が出土している一方、金腕環や環頭青銅刀子など、北方系の遺物が共伴している（河北省文物研究所

戦国期における燕の墓葬について

1985b, 石家庄地区文物研究所 1984)。この墓葬は出土した鼎などの青銅器から報告者は戦国早期に編年しているが、その年代はおおよそ妥当なものであるといえる。しかも、この墓葬は堅穴積石墓で、石でもって墓室を形成している。このような墓葬は中原諸国において一般的ではなく、北方によくみられる墓葬である。

また、同様の墓葬は三汲古城周辺でも調査されている。8001号墓や8102号墓、8003号墓などでは、上述の中同村2号墓のように石を積んで墓室を築成し、中原にみられる形態の青銅器と北方的な青銅器が共存している(河北省文物研究所 1987b)。報告ではこのような墓葬を春秋末から戦国早期の墓葬としているが、これらの鼎や壺、甕など中原的な青銅器の形態や紋様は中同村2号墓出土の青銅器に類似しており、妥当な年代であるといえる。このように、中山国の戦国早期までの墓葬は、中原的な青銅器を出土するものの、墓葬の形態や遺物に北方的な様相を強くみせる独特なものである。

その一方、三汲古城の周辺からは陶器副葬墓が調査されている。これらの墓葬を分析するためには、その年代的位置付けの確定が必要である。よって、年代を確定することのできる譽墓の分析からはじめたい。

中山国王譽墓は、三汲古城の西に存在する大型墓葬群中の一つの墓葬である。この墓葬は墓室から出土した兆域図や墓上遺構の調査によって、墓上に寝殿を持つ墓葬であり、周辺に国王譽及びその近親者の寝殿を保持する墓葬施設が造営される予定であったことも明らかになった(河北省文物研究所 1995, 河北省文物管理處 1979)。

譽墓は墓壙を形成するにあたって積石をおこなっており、上述の戦国早期の墓葬を思い起させるが、やはりそれも北方的なものであると考えられている。墓葬は墓道と墓室全体が中字形をなす。墓室には、中央に遺体をおさめた槨室が存在し、その周囲に副葬品を収納する東庫、西庫、北東庫がある。譽墓は槨室が盜掘されていたものの、副葬品を収納した東庫、西庫、東北庫は未盜掘で、これらからは大量の副葬品が出土した。ここからは青銅器、青銅鉄器、鉄器、陶器などが出土した。ここではこれらの遺物のうち、青銅礼器と副葬陶器を主に分析し、これらに関する中山国の特徴を明らかにしたい。(図16, 17)

このうち、西庫からは9点の青銅製を主とする升鼎が出土している。そのうちの1点である鉄足銅鼎には銘文が刻され、この銘文からこの墓葬が中山王譽墓であることが明らかとなった(図16-1)。また、升鼎が9点出土していることはこの墓葬が王墓であることを裏付けるものであるとされる。

また、この墓葬からは青銅製の蓋豆、方壺、円壺、小円壺、鬲、勺、甬鐘、盤、匜、甕、鳥柱盆などが出土している(図16)。他に陶器(図17)では4点の鼎、蓋豆、円壺、球腹壺、鴨形尊、碗、甕、盤、匜、鳥柱盆、筒形器などが出土している。

東庫からは青銅製の陪鼎、方壺、甕、筒形器、鳥柱盆、円盒、盤、匜などが出土し、他に、陶器では釜、匜、碗などが出土した。

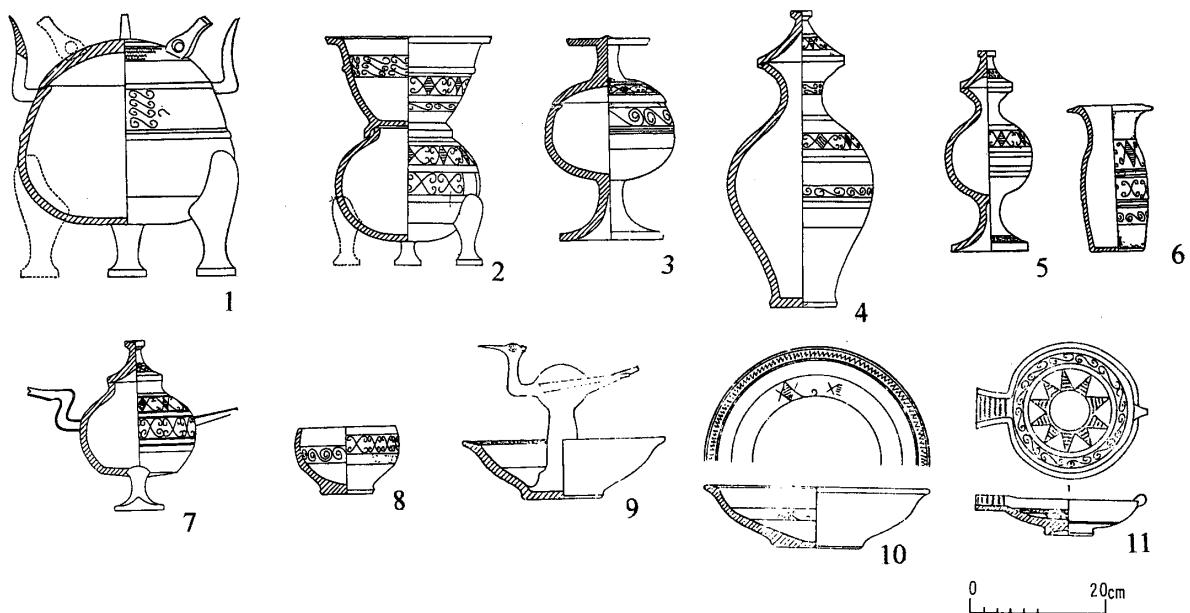


図18 中山国王譽墓4号陪葬墓出土陶器

(1 鼎, 2 瓮, 3 豆, 4 壺, 5 球腹壺, 6 筒型器, 7 鴨形尊, 8 碗, 9 鳥柱盆, 10 盤, 11 匜)

中山王譽墓から出土した遺物のうち、青銅器は鼎、蓋豆、壺などがみられ、この墓葬の基本的器種構成が、東周や三晋諸国、そして燕などの陶器副葬墓と同様、鼎、豆、壺であることがわかる。同様のことは、この墓葬から出土した副葬陶器においてもうかがい知ることができる。

一方、青銅製の方壺、球腹壺、盤（図16-4）、匜（図16-6）、鬲、勺、甬鐘、筒形器などが出でている。これらを燕の墓葬と比較した際、盤、匜、勺、甬鐘など燕の墓葬、特にii-b-3組のグループでみられる器種もあり、方壺は燕の方壺、球腹壺は燕の小口壺に対応する器種であると考えられる。また、陶器についても鼎、蓋豆、壺、球腹壺など対応する器種が存在する。しかし、器形や紋様を比較した際、大きく異なっている。また、陶器（図17）をこの時期（燕第IV期）の燕の陶器と比較した場合、例えば鼎（図17-1）は燕のものに比べ、下膨れの形態を為し、描かれる紋様も大きく異なっている。また蓋豆は燕のものに比べ脚部が短い（図17-10）。また壺についても頸部が短く、燕のものに比べて胴長な印象をあたえる（図17-7）。球腹壺も燕の小口壺に比べて頸部が長い（図17-8）。描かれる紋様は渦紋と、渦紋を組合せて三角形をなす紋様や獸形紋についても燕において鼎D2類、壺A類などにみられる紋様とは大きく異なっている。一方、燕の墓葬ではみられない器種が存在する。それは陶製の鴨形器（図17-9）、筒形器（図17-5）、鳥柱盤（図17-6）、甕（図17-2）等である。これらはこの墓から同様の器種の青銅器も出土していることから青銅器を模倣して製作された副葬陶器であるといえる。

これらの燕においてみられない副葬陶器や青銅器と同様のものは三晋諸国においてはみられる器種である。三晋諸国の副葬陶器に関しては、葉小燕氏や宮本一夫氏、張辛氏の論考がある（葉小

戦国期における燕の墓葬について

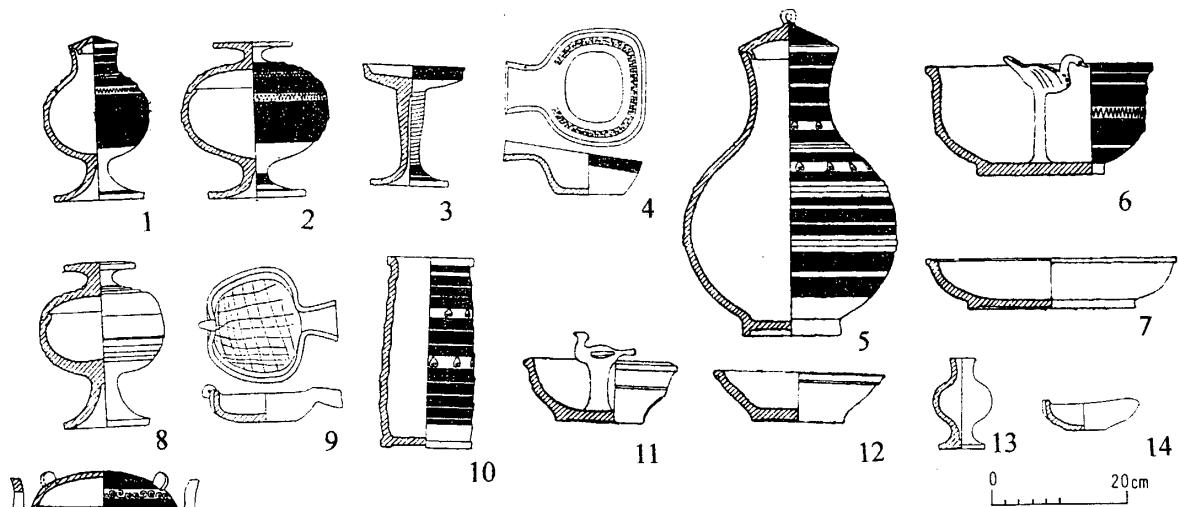


図19 平山三汲古城周辺墓葬出土陶器

(1・13 球腹壺, 2・8 豆, 3・9 平盤豆, 4・14 匣, 5 壺,
6・11 鳥柱盆, 7・12 盤, 10 筒型器, 15 鼎, 1-7: 8011号墓,
8-12: 8207号墓, 13-15: 8012号墓)

燕 1985, 宮本 1991, 張辛 1994)。宮本氏は、東周の所在地であった洛陽中州路の副葬陶器の編年を行うと共に、三晋の副葬陶器の編年を行い、このうち山西省東南部である長治地区の分水嶺の戦国墓について触れ、分水嶺35号墓から鳥柱盆や小口壺が出土していること、21号墓から筒形器などが出土していることを述べ、これらを三晋諸国における新出の副葬陶器とし、その年代を鬲の形態などにより紀元前4世紀前半としている。また、葉小燕氏も同様に中原（三晋諸国と東周）の副葬陶器を分析しているが、このような鳥形盆や筒形器の出現を紀元前4世紀の頃と考えている。また、これらの陶器の器形においても、中山国王畧墓出土のものと類似性がみられる。

一方、中山国王畧墓の周辺からはその夫人の墓とされている陪葬墓がみつかっている（図18）。この陪葬墓は1号墓から6号墓まで存在し、このうち3号墓は特にひどく盗掘を受けているが他の墓からは多くの副葬品が出土した。このうち6号墓は生活陶器のみ出土したため、報告では夫人ではなく、身分の低い人物の墓ではないかとしている（河北省文物研究所 1995）。1, 2, 4, 5墓からは副葬陶器のほか、玉器が出土している。しかし、青銅礼器は出土していない。これらの墓から出土した副葬陶器の器種はほぼ一致しており、鼎、蓋豆、壺、盤、匣、球腹壺（燕の小口壺と同じ器種）、瓶、鳥柱盆、鴨形尊、筒形器、碗、盤豆などが出土した（図18）。そして、これらの墓葬から出土した器種と出土点数は表4の通りである。

これらの墓葬から出土した副葬陶器はその器形や紋様において中山国王畧墓出土の副葬陶器とほとんど同一である。これらの陪葬墓は調査により層位的的見地から、国王畧の埋葬と同時に埋葬されたものではないことが明らかになっている。しかし、副葬陶器でみた場合、ほとんど時期差を見出すことができない。よって、ほぼ同時期と認めてよいものと考えられる。

また、これらの墓葬は棺・槨をもち、その墓葬の規模は表5の通りである。これらの墓葬は3号墓を除いて盗掘を受けているが、これらの墓葬から出土した鼎の数は1号墓が1点、2, 3号墓が

表4 中山国墓葬出土器種一覧

		青銅礼器	青銅甬鐘	編磬	陶鼎	陶蓋豆	陶壺	球腹壺	盤	匝	平盤豆	鴨形尊	鳥柱盆	碗	甌	筒形器
第1組	轡墓	○	○	○	4	4	4	2	2	2		2	1	2	1	1
第2組	轡墓1号陪葬墓				1		2	2	1	1	5	1	1	1	1	1
	轡墓2号陪葬墓				4	4	4	2	1	1	10	1	1	1	1	1
	轡墓3号陪葬墓							1	1	1			1	1	1	1
	轡墓4号陪葬墓				10	4	4	2	1	1	12	1	1	1	1	1
	轡墓5号陪葬墓				10	4	4	2	1	1	12	1	1	1	1	1
第3組	三汲古城8011号墓			○	○	○	○	○	○	○	○		○			
	三汲古城8207号墓			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
第4組	三汲古城8012号墓			○	○	○	○	○	○	○						

墓葬施設

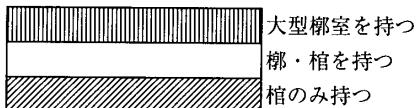


表5 中山国墓葬規模一覧

	墓葬規模(坑口)(メートル)
轡墓	14.9×13.55(槨室)
轡墓1号陪葬墓	7.48×6.94
轡墓2号陪葬墓	6.04×4.86
轡墓3号陪葬墓	5.5×4.7
轡墓4号陪葬墓	7.1×6.1
轡墓5号陪葬墓	7.46×6.22
三汲古城8011号墓	4.8×3.94
三汲古城8207号墓	3.72×2.66
三汲古城8012号墓	3×1.87

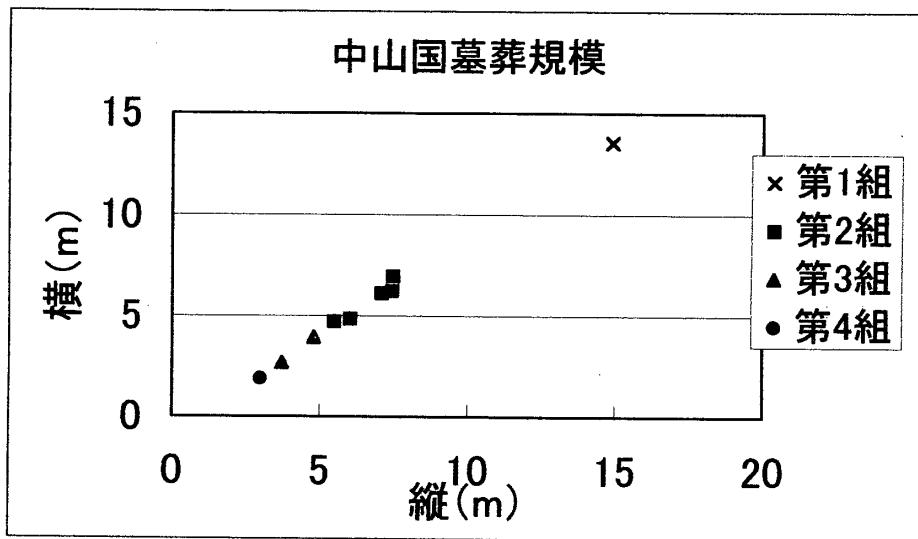


図20 中山国墓葬規模グラフ(数値単位: m)

戦国期における燕の墓葬について

4点である。そして4, 5号墓からは10点ずつ出土している。このことについて報告では、盗掘は受けているものの、4, 5号墓にはもともと5点または6点の鼎が2セット副葬されたのではないかと考えている。ところで、青銅製武器はこれらの墓葬からは出土していないが、副葬陶器という面からみた場合、副葬陶器の器種についてはこれらの墓葬は、国王饗墓と大きく変わることはない。なお、2号陪葬墓には、青銅製の小型鼎が1点副葬されていたが、出土したのはこれ1点のみで、饗墓のように、この墓葬が青銅礼器をセットととして副葬したものではないことは明らかである。このように、これらの墓葬は規模、副葬陶器の面での比較からも現在のところでは国王饗墓に次ぐ階層の墓葬と考えることができよう。一方、これらの墓葬は夫人墓と考えられており、女性の墓葬であるが女性墓が当時の礼制の基づく副葬陶器の組合せから外れるということがなかったという可能性があることがわかる。しかし、男女差の問題に関しては燕の墓葬でも述べたように、被葬者の男女差の明らかな調査報告が少なく、より一層のこのような視点からの調査報告の蓄積が求められる。

一方、三汲古城の周辺からは他にも陶器副葬墓が調査されている（河北省文物研究所 1987b）。これらの墓葬はすべて竪穴の土壙墓で内部に棺や槨を設けている。このうち、8011号墓（図19）は岡北村西墓区に位置し、墓葬の墓壙口規模は縦4.8、横3.94mである。この墓葬は棺と槨をもつ。この墓葬からは陶製の鼎、蓋豆（図19-2）、壺（図19-5）、球腹壺（小口壺）（図19-1）、盤（図19-7）、匝（図19-4）、鳥柱盆（図19-6）、平盤豆（図19-3）などが出土した。これらの出土点数は不明である。報告ではこの墓葬の年代を副葬陶器の器形が饗墓出土の副葬陶器と類似するとしほぼ同じ時期の墓葬としている。報告で示されている鼎や蓋豆の器形は饗墓出土の陶器に類似しほぼ妥当といえよう。

8207号墓（図19）は岡北村東墓区に位置し、墓葬の墓壙口の規模は縦3.72、横2.66mで棺・槨をもつ墓葬である。この墓葬からは鼎、蓋豆（図19-8）、壺、球腹壺（小口壺）、盤（図19-12）、匝（図19-9）、鳥柱盆（図19-11）、鴨形尊、筒形器（図19-10）、盤豆が出土した。これらの副葬陶器の出土点数は不明である。この墓葬の年代も報告では饗墓と同時期であるとされている。

8012号墓（図19）は岡北村西北墓区に位置し、墓葬の墓壙口の規模は縦3m、横1.87mである。この墓葬には槨がなく、棺のみをもつ。この墓葬からは鼎（図19-15）、蓋豆、壺、球腹壺（図19-13）、盤、匝（図19-14）が出土した。これらの副葬陶器の出土点数については不明である。報告ではこの墓葬が上述した饗墓の時期と同じである8011号墓や8207号墓に比べて副葬陶器の器種が少ないことを根拠として、中山国が衰亡していく過程の時期の墓葬としてとらえ、8012号墓が8011号墓や8207号墓より時期的に遅れるとしている（河北省文物研究所 1987b）。しかし、8012号墓から出土した鼎（図19-15）は報告で鼎I式とされ、この鼎と同様のものが8011号墓からも出土しており、8011号墓との間に時期差を考えることは難しい。また報告に図示された鼎も腹部などの形態が饗墓出土の陶製鼎に類似し、ほぼ同時期と考えて妥当であろう。また、紋様があまり施されない平盤豆の形態についても同様である。

3 小結

このように、中山国における墓葬をその都城であった三汲古城周辺から調査されたものについてみてきた。これらの陶器副葬墓は出土陶器の形態の類似から、銘文によって紀元前4世紀に位置付けられる中山国王轟墓とほぼ同時期の墓葬とすることができる。これらの墓葬の時期は燕の副葬陶器の編年では東斗城村29号墓や燕下都九女台墓区第16号墓などの第IV期に併行する。これらの墓葬について各墓葬の副葬陶器、及び青銅器の器種についてまとめたのがである。この表でわかるよう中山国の各墓葬は副葬陶器と青銅器の有無によって大きく4つの組に分離される（表4）。

第1組は、青銅礼器のセットを持ち、さらにそれを模倣した副葬陶器を保持する。この組が保有する器種は表4の通りである。この墓葬には中山王轟墓が属する。

第2組は、青銅礼器をセットとして持たず、青銅器を模倣した副葬陶器を保持する。副葬陶器の器種は第1組が持つ副葬陶器とほとんど同じである。この組に属する墓葬は中山王轟墓の陪葬墓である1号から5号陪葬墓である。

第3組は、青銅礼器を持たず、青銅器を模倣した副葬陶器を保持する。副葬陶器の器種は第2組でみられた甕を持たない。また、第2組ではセットでみられた鳥柱盆、鴨形尊、筒形器がそろって一つの墓葬から出土した例がない。第3組に属するのは三汲古城8011、8207号墓である。これらの墓葬から出土する副葬陶器は第1組、第2組でみられたような刻紋のほかに、暗紋が多くみられる。一方、無紋に近いものも存在している。

第4組は、青銅礼器を持たず、青銅器を模倣した副葬陶器を保持する。副葬陶器の器種は最も少なく、鼎、蓋豆、壺、球腹壺（小口壺）、盤、匜である。この組に属する墓葬は三汲古城8012号墓である。第4組も第3組と同様、刻紋の他に暗紋が多くみられる。無紋のものやそれに近いものも存在する。

中山国の墓葬は紀元前4世紀後半の時期に上のような4つの副葬陶器・及び青銅器の組合せに分けることができる。このような4つの組合せの差異はいったい何に起因するのであろうか。この4つの組合せそれぞれに関して、墓葬の墓壙の規模を示したのが表5である。そして、グラフ化したのが図20である。これによると、第1組から第4組にわたって次第に墓葬の規模が小型化していることが明瞭にわかる。

また、墓葬の施設についても、小型化に対応するように簡単な構造になっている。また、出土する陶器の紋様という点でも、第3組、第4組の副葬陶器にみられる紋様と、第1組、第2組にみられる紋様には違いがみられる。第1、2組では、器体全体を磨き、刻紋によって幾何学紋や動物紋を描く。一方、第3組、第4組の副葬陶器は刻紋のほかにミガキ痕による紋様的効果をみせる暗紋が多用されている。これらの副葬陶器の器形は特に紋様があまり施されない平盤豆がこれらすべてで同一形態であり、紋様が異なる副葬陶器の間でも器形が類似している。同時期に紋様の種類や多少の差のあるいくつかの系統の副葬陶器が同一器種のなかに存在した可能性がある。これはちょうど、燕においてみられた状況と一致し、燕においてはそのことが階層差と大きく関わっていたこと

戦国期における燕の墓葬について

については上述した。しかし、中山国においては調査例が少ないため、燕のような編年的関係のなかで位置付けることはできない。よって、可能性を指摘するにとどめたい。

このように、中山国における墓葬の副葬品で、特に本論の分析対象である青銅器や陶器を同期の燕墓、特に九鼎墓である燕下都九女台墓区第16号墓を頂点とするⅣ期、そして鼎、豆、壺を基本的な組合せとするⅢ期以後とを比較した場合、次のようなことがいえる。

- ① 中山国では王墓レヴェルの墓葬には青銅器が副葬される。特に愈偉超氏が指摘した身分を示す升鼎が中山国では青銅であるのに対し、燕では陶器である。
- ② 燕と中山国において、紀元前4世紀後半の基本的な副葬陶器や青銅器の組合せは、東周や三晋諸国と同様に鼎、豆、壺（盤、匜、小口壺）である。
- ③ 燕と中山国において共通にみられる器種の副葬陶器も器形や紋様において、ほぼ同時期のものでも大きな違いがみられる。
- ④ 燕の墓葬特に上位階層者の墓葬（ii-b-3組）にみられるような、簋や方鼎などといった「復古形態」の副葬陶器は中山国には存在していない。
- ⑤ 一方、中山国の中の墓葬においてみられ、燕の墓葬においてはみられない鳥形盆や筒形器などの器種がある。そして、これらの器種は同様の形態をなすものが三晋諸国にみられる。
- ⑥ 燕と中山国の中の墓葬においてみられる器種的な差異は上位階層の墓ほど大きくなる。一方、下層の墓においては鼎、豆、壺、小口壺、盤、匜といった器種が共通にみられる。ただ、これらの器形や紋様は異なる部分が多い。
- ⑦ 中山国の中の墓葬の構造や出土遺物の中には三晋諸国や燕にみられない北方的要素が多く見られる。

以上のことから、紀元前4世紀後半の燕、そして中山国の中の墓葬出土の副葬陶器を主とする副葬品に違いが存在していたことがわかる。

すぐ前にも述べたように、中山国においては現在のところ墓葬の調査例がまだ多くはなく、燕のように紋様などを含めて、詳細に副葬陶器の編年と階層との関係について論じることはできない。しかし、上述したように中山国におけるある程度の墓葬の変遷観を論じることは可能である。春秋晩期から戦国前期にかけては中原系の青銅器と北方的な青銅器を保持する墓葬である。そして、墓葬の構造は石を以って構築したもので北方的な様相を強くしめすものである。これらの墓葬は燕の墓葬編年でいえば、第Ⅰ期から第Ⅱ期にかけてであるといえよう。

一方、紀元前4世紀後半にあたる譽墓の段階は燕の第Ⅳ期にあたる。そして、この時期の墓葬は三汲古城の周辺にもみられ、その様相に関しては上述した通りである。この時期の墓葬は、中山王譽墓においては墓葬構造において石を用いることや、北方的な様相をみせる天幕の骨組であったと考えられる青銅棒製品が出土している（河北省文物研究所 1995）。しかし、この時期の他の墓葬を含めて検討した場合、副葬陶器や青銅礼器のありかたは三晋諸国に一致し、戦国前期とは大きく異なっているといえる。

石川 岳彦

上述したように、譽墓段階の中山国において上位階層者の墓葬にみられる鳥柱盆、鴨形尊、筒形器といった副葬陶器の器種は当時の三晋諸国においてみられたものである。また、これらの器種が三晋諸国においても上位階層者の墓葬に副葬されるという指摘があるが（葉小燕 1985, 宮本 1992），このことも中山国と三晋諸国が一致している点である。上で分析した墓葬に関しては副葬陶器の器形がほぼ一致しているため、ほぼ同時期として考えたが、中山国は戦国晚期には燕と趙によって滅亡しているため、分析した墓葬が中山国滅亡後のものであるおそれもあるかもしれない。しかし、中山国王墓である譽墓から、これら三晋諸国と共通する器種の青銅器が出土していること、そしてそれを模倣した副葬陶器が出土していることを考えても、中山国における副葬陶器や青銅器の器種が三晋諸国と一致していたと考えることができ、中山国滅亡前にも同様であったものと考えることができる。

一方、燕の墓葬においては先に分析したように、中山国の上位階層者にみられるような器種は存在せず、代わりに「復古形態」の副葬陶器が存在する。また、確実に青銅器を副葬した墓葬が存在しない。このことについては、盗掘によって青銅器が無くなつたという指摘（河北省文化局文物工作隊 1965b）と、もともと青銅器を副葬しなかつたという指摘がある。このうち秋山進午氏によれば、燕下都九女台墓区第16号墓が燕下都造営の際に過去の燕王を祭るために陶器を埋納した祭廟的な施設である可能性を指摘している（秋山 1982）。しかし、この燕下都九女台墓区第16号墓から出土したような副葬陶器は燕における他の墓葬においても見られる。また、辛庄頭墓区第30号墓のような大型墓葬においても同様に、副葬陶器のみが出土している。そして編年によって示されたように、辛庄頭墓区第30号墓は九女台墓区第16号墓に遅れる時期のものである。よって、これら大型の陶器副葬墓は一時期に造営されたものではないことは先に述べた。また、中山国において王墓クラスの譽墓のみに副葬された器種としては甬鐘や編磬があるが、この器種は燕においても九女台墓区第16号墓や辛庄頭墓区第30号墓などのii - b - 3組のなかでも最上層にみられるものである。しかし、燕においてはこれらの器種は陶器によって作られている。このようなことから、燕においては他国で副葬される青銅器が陶器によって製作されていたと考えるほうが自然である。

その一方で燕と中山国においては同様の様相も見出すことが可能である。燕と中山国は基本的な副葬陶器の組合せが紀元前4世紀後半段階では鼎、豆、壺である。そのため器種というレベルから見た場合、特に規模の小さい下級墓葬において副葬陶器の組合せが同じものになる。しかし、期形や紋様という面から比較した場合、燕と中山国の中の墓葬の副葬陶器は大きく異なつたものである。特に器形の面で大きな差異をみせるのが蓋豆である。

燕において、蓋豆は上述したように蓋豆A類、蓋豆B類という形態のものが存在するが、これらは戦国期にわたって燕において一貫してみられるものである。そして、これらの蓋豆は上述したように春秋晚期には存在した青銅製の蓋豆を模倣したものである。そして、これらの青銅製の蓋豆は林巳奈夫氏や宮本一夫氏によって燕に独自の形態の青銅器とされているものもある（林 1989, 宮本 1991, 宮本 2000）。

戦国期における燕の墓葬について

一方、中山国においては脚の低い蓋豆が出土している。副葬陶器との関連で注目される青銅器は、中山国王魯墓において出土しており、同様の形態の蓋豆である。そしてこのような比較的脚の低い青銅製蓋豆は中山国をはじめ三晋諸国においても出土しているものであり、これらの地域において副葬陶器の蓋豆は紀元前4世紀後半においてはこのような脚部の低い青銅製蓋豆を模倣したものと考えることができるであろう。

このように、燕と中山国の墓葬においてみられる特徴の比較から燕の独自性というものが明らかになる。

V まとめ

1 燕における副葬陶器と青銅器のあり方と特徴

これまで、燕における墓葬と副葬品、特に副葬陶器に関して編年を行い、副葬陶器にあらわれた被葬者の社会的性格の分析、そして、周辺諸国、特に燕に隣接している中山国の墓葬との比較を行い、さらに副葬陶器においてこれまで、ある程度の近親性を指摘されることのあった三晋諸国や東周との関係を言及した。

燕においては春秋期の遺跡及び墓葬は戦国期に比べてほとんど調査例がない。確実に春秋期の墓葬として指摘されうるのは、河北徐水大馬各庄春秋墓と河北唐山賈各庄18号墓であり、そこから出土した青銅器は現在洛陽中州路の第3期に併行するものと考えられている。一方で、この時期には陶器副葬墓が出現していた。そしてその墓葬から出土した器種の組合せは鼎、蓋豆、尊であり、洛陽や晋での副葬陶器の器種構成と一致する。しかし、この時期にみられる蓋豆A類は、賈各庄18号墓でみられるような脚の長い燕独自の形態の青銅製蓋豆を模倣したものであるといえる。この時期には、このように青銅器をも副葬する墓葬と、副葬陶器のみを副葬した墓葬がみられるが、両者の間の関係についてはこの時期より前の時期の資料も含めて調査例が少なく、解釈は保留したい。この時期を第I期とした。

続く時期には、副葬陶器墓の陶器器種に壺が加わってくる。また、盤や匝がセットでみられるようになる。そして、盤、匝の保有の有無は被葬者の階層差として捉えうるものである。この時期には、鼎はC類がみられ、壺も紋様の施されるA類型と無紋のB類やC類などが存在し、その後の鼎の主流となる鼎D類もみられるようなる。第I期にみられた鼎とは異なり、ある程度定型化した鼎が見られるようになり、その後の燕の副葬陶器と系譜をたどることのできる鼎D類、壺A類、壺B類が出現した時期で、その後における陶器副葬の展開の基盤となつたといえよう。一方、この時期にも青銅器を副葬する墓葬が存在する。しかし、調査例が少なく、大型墓葬も調査例が無く、第I期同様、これらとの関係を解釈することは保留したい。実年代は共伴する青銅器によって、春秋末から戦国初期を考えることができるが、壺の出現は、東周や三晋諸国で春秋と戦国の転換期にみられる鼎、豆、尊から、鼎、豆、壺への副葬陶器の器種変化（中国社会科学院考古研究所 1959,

石川 岳彦

宮本 1992, 飯島 1998) を思い起させるが、燕においては尊がこの時期にも存在しており、これらの地域でみられるような器種構成の急激変化ではなく、春秋期的な様相を保持した時期がある程度続いたと考えられる。そして、それはこの時期の燕の特徴的なあり方であるともいえよう。このことは、青銅器に関しても第Ⅰ期に続いて燕独自の青銅器が存在していることからも深く伺える。

第Ⅲ期には、尊が姿を消し副葬陶器の基本的器種構成は鼎、蓋豆、壺になる。この器種の基本的組合せは、東周の存在した洛陽地区や三晋諸国の陶器副葬戦国墓と一致した様相であるといえる。しかし、この時期には、林巳奈夫氏によって指摘された「復古形態」の副葬陶器（林 1981）が登場してくるものと考えられる。そして、それらの「復古形態」の副葬陶器は極めて燕の独創的なものである。それとともに、この時期には装飾に富む鼎D2類のような器種も登場してくる。このような副葬陶器のありかたは基本的に、この第Ⅲ期から最終段階の第V期まで維持される。第Ⅳ期には、燕下都内に大規模な封土をもつ大型墓葬である九女台墓区第16号墓のような燕王墓クラスの墓葬がみられるようになる。

一方、第Ⅲ期から登場した燕の副葬陶器のありかたは非常に興味深いものである。燕の副葬陶器については、器種組合せが非常に鮮明に分別される。それは大きく3つのグループに分かれ、鼎、蓋豆、壺という基本的組合せのみのもの（ii-b-1組）、それに加えて盤と匝を持つもの（ii-b-2組）、さらにこの第Ⅲ期にみられるようになる燕的な「復古形態」の副葬陶器をももつもの（ii-b-3組）である。ii-b-1組とii-b-2組については、盤と匝のセットが第Ⅱ期には登場しており、第Ⅱ期にみられたようにそれが被葬者の階層的差異を示すものと考えられた。さらに、第Ⅲ期以降の時期には「復古形態」の副葬陶器がみられ、その墓葬は規模や構造において、他の墓葬に比べ複雑、かつ大型であり、この燕的な様相をもつ「復古形態」の副葬陶器は燕の階層上位者の墓葬に独占的にみられるものであるといえる。そして、このii-b-3組のグループにおける鼎、壺、蓋豆、盤、匝といった副葬陶器においても鼎D2類や壺A類などといった装飾性豊かなものになっていることは、そのことと関係付けられる。このように、燕の墓葬における副葬陶器のありかたを編年との関係が明確に裏付けられる。

このような燕の様相は非常に特殊なものである。そのことは他の戦国諸国と比較した時に明瞭になる。中山国においては上述したように国王墓が良好な状態で調査され、燕の第Ⅳ期に併行する時期の墓葬の様相が社会階層の問題でも検討しうる国である。中山国も、燕と同様副葬陶器の基本的組合せは鼎、蓋豆、壺（盤、匝）である。そして、墓葬の規模や構造に対応する形で副葬品のあり方が異なる。中山王墓では、青銅器が副葬される。そして王墓の陪葬墓（夫人墓）には青銅器は副葬されない。しかし、青銅器を模倣した副葬陶器がみられる。これらの墓に埋葬される副葬陶器、及び青銅器には、上述の器種に加えて、鳥柱盆、筒形器、鴨形尊といった器種が見られ、これらはその形態を含めて、同時期の三晋諸国の様相と一致している。その他、燕において、燕下都内に墓群を為し、大型封土をもつ最大型墓葬にのみにみられる甬鐘や編磬などは陶器でつくられる。一方、中山国においてこれらの器種がみられるのは中山王墓のみである。しかし、中山国においては甬鐘

戦国期における燕の墓葬について

は青銅製、編磬は石製であり、この時期の中国で普遍的なありかたであり、これらは燕では見られないものであり、燕の独自性が際立つ。一方、下級層の小型墓葬には副葬陶器器種の基本的組合せのみであり、器種的には燕と一致する。しかし、器形が異なっている。

以上のことから燕の副葬陶器のありかたがつぎのように見えてくる。燕においては基本的な器種構成といった面では第Ⅱ期における尊の残存といった春秋的要素を残しつつも東周や三晋諸国と一致して春秋期から戦国期への転換がおこったものと思われる。東周や三晋諸国については、東周の洛陽中州路の墓葬群にみられる器種変化はこれまで、春秋期から戦国期に移るにあたって墓葬への陶器副葬の一般化とそれに現われた戦国的な礼制の確立とされてきた（飯島 1998）。また、三晋諸国では紀元前4世紀はじめには鳥形盆や筒形器など新出の器種が上位階層者の墓葬に見られるようになる。これは紀元前4世紀後半という時期だが、中山国でも一致している。これらの器種が、王墓クラスの墓葬に副葬された青銅器を模倣したものであることは上述のとおりである。一方、燕では基本的器種構成では東周や三晋諸国より緩やかな変化として（尊の残存）、戦国期を迎えた。そして、鼎、蓋豆、壺という中原諸国（東周、三晋諸国）と一致した副葬陶器のありかたが確立するとともに（第Ⅲ期）、時をほぼ同じくして上位階層者の墓葬では、その他の国とは全く異なった様相みせる。それが「復古形態」の副葬陶器である。また、燕では青銅礼器は副葬されなかつた可能性が高い。それら礼器はすべて陶器になっている。このように、燕における「戦国化」とでもいうべき墓葬にあらわれる変化は、他の周辺国家と一致を示しながら、一方で相違をもあわせもつという非常に複雑な様相をしめす。

このようにして確立した燕における戦国期の副葬陶器のありかたであるが、このようなありかたは戦国期を通じて持続したものと考えられる。燕における副葬陶器の基本的組合せが鼎、蓋豆、壺であったことは先に述べた通りである。これは、副葬陶器の器本的組合せが洛陽中州路においては、戦国晚期には豆の脚部が短くなり、鼎、盒、壺に変化する（中国社会科学院考古研究所 1959）のと好対照をなす。燕において、蓋豆は燕独自の脚部の長い青銅豆を模したものであり、洛陽におけるおけるような変化はみられない。

そして燕で最末期の墓葬のひとつと考えられるのは燕下都辛庄頭墓区第30号墓である。この墓葬に関しては前漢前期の墓葬ではないかという指摘がある（志賀 1994）。副葬陶器に関してみた場合にも、それまでの墓葬とは異なった様相をみせる。この墓葬はii-b-3組であるが、「復古形態」の副葬陶器を持つほか、これまでみられなかつた副葬陶器ももつている。このことに関連して、辛庄頭墓区第30号墓の存在する燕下都には、前漢代の遺物もみられ、城壁の一部は前漢代に構築されたという指摘（許宏 1999）もなされている。よって、燕下都は燕の滅亡と共に廃絶したのではないということも十分考えられる。今後の資料の増加を待ちたい。

2 燕と北方との関係

燕と北方の関係に関しては、これまで遼寧喀左大城子1号墓や瀋陽南市区の燕の副葬陶器墓）に

石川 岳彦

について言及してきた。このうち、宮本一夫氏はこの墓葬出土の副葬陶器についてその形態が退化がはなはだしいとして、最末期の紀元前3世紀のものとした。また、陳光氏は、この墓葬を氏の編年の第4組とし、春秋晚期に位置付けた（陳光 1997, 1998）。そして、文献にある昭王代における燕の遼寧進出の記事に触れ、この墓葬の被葬者を燕の流民とし、この地域が燕の領域に属していないとした。同様の見解は遼寧瀋陽南市区戦国墓についても述べている。しかし、陳光氏の編年は、この墓葬を第4組におく根拠が明らかでない。

では、上述の燕の編年では喀左大城子1号墓（朝陽地区博物館・喀左県文化館 1985）はどこに位置付けられるのだろうか。この墓葬の副葬陶器の器種は鼎、蓋豆、壺、盤、匝でii-b-2組のグループである。この墓葬から出土した陶器は作りが雑で、比較検討が難しい。しかし、全体的器形から考えると、鼎はD1類で、蓋部鉢が一つであるが、胴体部が全体に丸みをもつ。また壺B類は圈足がそれほど高くはない（図6-17）。また、蓋豆は壺部が完全に丸くではなく、やや扁平である。これらの特徴は、第Ⅲ期の副葬陶器の特徴に一致する。よって、喀左大城子1号墓は第Ⅲ期に位置付けられるものであろう。この墓葬が燕の流民の墓葬であるという陳光氏の見解があるが、むしろこの墓葬の存在はこの地域に燕が進出していたことを示すといえよう。

一方、遼寧凌源三官甸（遼寧省博物館 1985）では、遼寧式銅劍とともに中原的な青銅器が共伴する。この墓葬は石槨墓で、墓葬の長軸は東西向きであり、燕の墓葬が長軸が南北向きであるのと好対照をなす。このようにこの墓葬は遼寧式銅劍をもつ文化に属するものであるといえる。しかし、この墓葬から出土した青銅器のうち、戈に関しては上述したように、報告ではこの銅戈の形態が燕の成候（紀元前358年～紀元前330年）に比定されている、燕候庫戈に類似するとしている。また、青銅鼎についてもこれらは第Ⅲ期に属し、戈の年代とも矛盾しないことは上述した。なお、この墓葬から出土した遼寧式銅劍は、遼西において最後期の型式（秋山 1968, 1969, 鞍楓毅 1983）である。遼寧式銅劍をもつ三官甸と燕的な墓葬である眉眼溝は地理的にかなり近い位置に存在している。そして、その時期もともに第Ⅲ期である。また、この第Ⅲ期という年代は文献に見られる昭王期の遼寧進出より早い時期である。よって、これらのことから燕の遼寧進出が文献に現われるより早い時期であること、また、燕の進出の結果、在地的な遼寧式銅劍を持つ文化の集団と燕の集団が雑居的に存在したものと考えられ、宮本氏も指摘するように（宮本 2000），進出当初において、燕は遼寧に領域国家的に進出したのではないことがわかる。このことも上述の想定を補強する材料であるといえる。また、瀋陽南市区墓葬に関しては発表資料が写真のみであるので詳細な時期の確定は不可能である。なお、遼寧省遼陽周辺の墓葬に関しては、戦国墓が調査されているらしく、そこから出土した陶鼎が耳の長いものであったという記載もみられる（宮井 1996）。燕の陶鼎は上述したように時間の経過と共に、耳が長くなる傾向にあり、戦国後半期の鼎である可能性があるものと思われる。

このように、燕の遼寧への進出に関しては、その時期が文献記載にみられる昭王代の秦開による遼寧遠征より早い時期で、そのありかたが、燕の支配領域が領域的に広がるのではなく、ちょうど

戦国期における燕の墓葬について

遼寧式銅劍をもつ文化がみられる地域に楔を打ち込むように燕が拠点的に広がっていったものと考えられるのである。

VI おわりに

これまで燕の墓葬に関して、副葬陶器を中心に分析してきた。燕については、「復古形態」の副葬陶器の存在と、それが燕の大型墓葬にみられることが指摘されてきた。また多くの研究者によって副葬陶器の編年が行われてきた。今回、『燕下都』で報告された各種遺跡の出土遺物の編年による副葬陶器を編年と各墓葬でのあり方を墓葬規模と墓葬の構造を行うことによって、戦国期の燕の墓葬が周辺の中原諸国、特に戦国期に、日常陶器を副葬するという「革新性」をみせる秦（岡村 1985）や、三晋諸国、そして三晋諸国と副葬陶器の器種を中心に一致する中山国の副葬陶器のあり方とは大きく異なっていることがわかる。そして、そのような燕における副葬陶器の状況は、戦国期の比較的早い時期、（燕が副葬陶器の基本的器種構成において東周や三晋諸国でとらえられているように鼎、豆、尊から鼎、豆、壺に変化することを「戦国化」とするならば）、燕の「戦国化」とともに出現してきたものであることも明かになった。このように、燕の墓葬における副葬陶器のあり方は燕の地域性を強く示すものである。

しかし、その一方で燕における副葬陶器は基本的器種構成において、中山国をはじめ、三晋諸国や東周と同様の状況を見せる。このように当時の汎中原的に見られた状況と一致した状況を見せる。一方、文献による研究を中心に、中国における戦国期は、生産力の上昇により、商工業の活性化、富裕階層の増加が見られる時期とされる。その一方で秦漢帝国成立前夜にあたり、領域国家の成立と集権国家の萌芽が指摘されている（鶴間編 1998）。墓葬における副葬陶器は燕においては「戦国化」と共に出現した「復古形態」の副葬陶器としてとらえられることがわかったが、このような副葬陶器は階層上位者の墓葬に独占される。そして、王墓が調査され、副葬陶器の基本的器種が燕と一致する中山国との比較により、国ごとの副葬品の違いは上位階層の墓葬ほどに大きくあらわれていることがわかる。

そして、これらの分析によって最上層に位置するとされる墓葬は、燕下都内に墓域を形成して存在している。中山国も含め、このように上位階層者の墓葬が他の人々の墓葬から分離して墓域を形成することについては、秦漢代にみられる「王陵」の成立と関わりがあるという指摘もあり（秋山 1982），秦漢代の強力な集権国家の成立の前史的位置付けを想起させる。

以上の副葬陶器を中心とする墓葬分析の方法論をもって燕の墓葬について分析を行ってきた。このような分析は中山国にみられたように他の戦国諸国にも応用可能であり、このような分析によって、地域色を持ちながら、統一集権国家への収斂という展開をみせた中国の春秋戦国時代の諸様相が明らかになるものと考えられる。

石川 岳彦

最後になりましたが、本論完成までに東京大学考古学研究室の諸先生方、諸兄方に有意義なアドバイスをいただきました。また、本論の基礎になりました墓葬も含めた燕下都の問題については、1999年4月24日に駒沢大学において日本中国考古学会関東部会例会で「燕下都に関する諸問題」として発表しました。その場で、ご出席の諸先生方に大変示唆に富むご教示をいただきました。これらが、本論をまとめるにあたっての基盤となったことは改めて述べるまでもありません。

これまでお世話になりました皆様に改めて感謝申し上げます。

(本論は1999年度に東京大学人文社会系研究科に提出した修士論文の一部を加筆・修正したものである)

註

- 1) 『燕下都』において、解村2号墓について、壺に魚や鳥の紋様が描かれていることを根拠に戦国中期に編年されている。なお、『燕下都』では、このような紋様を施す壺は、戦国中期頃の中原諸国におけるこの種の紋様を施す土器の流行を根拠にしているようであるが、この種の壺を副葬する墓葬の年代はすべて戦国中期として報告されている。また、辛庄頭墓区はやはり、戦国晚期に編年されている。
- 2) 燕における易（燕下都とされる）への遷都の記事が文献みられる。一つは『史記』「燕召公世家・集解」に「桓侯徒臨易」という記事、もう一つが『水經注』「易水」にみられる「…昔燕文公徒易，即城也」とう記事である。『史記』「燕世家」の記載によると燕の桓公、文公ともに二人ずつ存在している（白寿彝編 1994）。桓公（紀元前696～紀元前691年在位）（紀元前372年～紀元前362年在位）、文公（紀元前554年～紀元前549年在位）（紀元前361年～紀元前330年在位）である。石永士氏は桓公を桓公（紀元前696～紀元前691年在位）に比定し、文公を文公（紀元前554年～紀元前549年在位）に比定している（石永士 1996、河北省文物研究所 1996、石永士 1998）。よって、石永士氏の考えによれば燕下都の存在した易への遷都は春秋前期と春秋後期の二度あったことになる。そして、現在、遺構として残る燕下都は春秋後期以後、燕王喜が秦によって遼東に逃れるまでの都城であったことになる。
- 一方、甌燕氏は燕桓公を桓公（紀元前372年～紀元前362年在位）に、文公を文公（紀元前361年～紀元前330年在位）に比定している（甌燕 1988）。この場合桓公と文公は代続きの燕公になり、『史記』と『水經注』の記事は易（燕下都）への遷都という戦国中期におきた事実を指すと推定でき、燕下都への遷都は戦国中期に起きたことであるとされる。
- 3) 第3, 6, 8, 12組は前後二つの時期に分けられている。
- 4) 陶器の蓋豆を副葬していないのは河北易県西賁城村14号墓、河北唐山賈各庄16号墓、天津張貴庄10号墓、遼寧瀋陽南市区戦国墓葬、河北易県燕下都辛庄頭墓区30号墓で、このいくつかの墓葬についてはあとで詳述する。
- 5) 宮本一夫氏は九女代墓区16号墓や解村2号墓で出土する「帶流罐（河北省文物研究所 1996）」を尊として他の墓葬から出土する尊と同一系列上で論じ編年し、燕の副葬陶器の特徴の一つとして副葬品に尊が残ることをあげている（宮本 2000）が、この「帶流罐（河北省文物研究所 1996）」は大型の墓葬のみから出土するもので、他の墓葬から出土する尊は後で述べるように生活遺跡からも出土する器種であり、同一系列上で論じることは難しいと思われる。よって本論では「帶流罐（河北省文物研究所 1996）」は器種として尊の中に含めていない。
- 6) 陳光氏の副葬陶器の編年では燕の副葬陶器は氏の編年による「第8組」に属する陶器へ時期が下る

戦国期における燕の墓葬について

- ごとに一系統的に装飾性を増すことになっており、私の分類による豆Bはこの第8組にのみ見られることになる。
- 7) 報告でなされている戦国早期、中期、晩期がそれぞれ絶対年代でいつかということについては、触れられておらず、相対年代として捉えるほかない。
 - 8) これらの瓦の年代も郎井村10号作坊遺址と同様に、絶対年代比定の根拠の面で問題があるものの、殆どすべてが戦国中期、または戦国晩期に比定されている。
 - 9) 図8-5の陶器に類似する蓋部が鳥、または獸頭形をなす青銅器は寧樂美術館蔵、Nelson-Atkins Museum of Art 蔵の鳥頭壺があるようである（林 1989）。これらは類例がほとんど無く、林巳奈夫氏の戦国Ⅱ期のものとされる。これらの鳥頭壺は胴部に把手がついている。また、圈足がついており、辛庄頭墓区第30号墓出土のものとは、異なる点も多い。
 - 10) 東周に関しては、この時期の中原の基準遺跡となる洛陽中州路の報告があり、副葬陶器に関しては飯島武次氏や宮本一夫氏の論考（宮本 1992、飯島 1998）がある。秦に関しては、飯島武次氏や岡村秀典氏（岡村 1985、飯島 1998）の論考がある。三晋諸国に関しては葉小燕氏、宮本一夫氏（葉小燕 1985、宮本 1992）の論考がある。

＜引用・参考文献＞

- 安徽省文物管理委員会・安徽省博物館 1956「寿県蔡侯墓出土遺物」『考古学専刊』乙種第5号
安志敏 1953「河北省唐山市賈各庄発掘報告」『考古学報』第6冊：57-116
伊克昭盟文物工作站・内蒙古文物工作隊 1980「西溝畔匈奴墓」『文物』1980-7：1-10
河北省文化局文物工作隊 1965a「河北易県燕下都故城勘察和試掘」『考古学報』1965-1：83-106
河北省文化局文物工作隊 1965b「河北省燕下都第16号墓発掘」『考古学報』1965-2：79-102
河北省文化局文物工作隊 1965c「1964-1965年燕下都墓葬発掘報告」『考古』1965-11：548-561, 598
河北省文化局文物工作隊 1965d「燕下都遺址外圍発現戦国墓葬群」『文物』1965-9：60-61
河北省文物管理處 1979「河北省平山県戦国時期中山国墓葬発掘簡報」『文物』1979-1：13
河北省文物研究所 1985a「河北易県燕下都第16号墓車馬坑」『考古』1985-11：1042-1043
河北省文物研究所 1985b「河北新楽中同村発現戦国墓」『文物』1985-6：16-21
河北省文物研究所 1987a「河北易県燕下都第13号遺址第1次発掘」『考古』1987-5：414-428
河北省文物研究所 1987b「河北平山三汲古城調査与墓葬発掘」『考古学集刊』5 中国社会科学出版社
：157-193
河北省文物研究所・保定地区文物管理所・徐水県文物管理所 1990「河北大馬各庄春秋墓」『文物』
1990-3：32-41
河北省文物研究所 1995『譽墓—戦国中山国国王之墓』文物出版社
河北省文物研究所 1996『燕下都』文物出版社
金殿士 1959「瀋陽市南市区発現戦国墓」『文物』1959-4：73-74
常惠 1929『国立北平研究院調査報告第二種 易県燕都古址調査報告』国立北平研究院出版部
山西省考古研究所 1984「山西長子県東周墓」『考古学報』1984-4：503-529
石家庄地区文物研究所 1984「河北新楽県中同村戦国墓」『考古』1984-11：971-973
蘇天鈞 1959「北京昌平区松園村戦国墓墓葬発掘記略」『文物』1959-9：53-55
孫繼安 1993「河北容城県南陽遺址調査」『考古』1993-3：235-238
大葆台漢墓発掘組・中国社会科学院考古研究所 1989『北京大葆台漢墓』中国田野考古報告集 考古學
専刊丁種第35号 科学出版社
中国社会科学院考古研究所 1959『洛陽中州路（西工段）』中国田野考古報告集 考古学専刊丁種第4号

石川岳彦

- 科学出版社
中国社会科学院考古研究所・河北省文物管理处 1980『満城漢墓発掘報告』文物出版社
中国社会科学院考古研究所 1996『双砣子与崗上—遼東史前文化的發現和研究』中国田野考古報告集
考古学專刊丁種第49号 科学出版社
中国歴史博物館考古組 1962「燕下都城址調査報告」『考古』1962-1: 10-19, 54
张家口市文管所・下花園区文教局 1988「张家口市下花園区発現の戰国墓」『考古』1988-12: 1138-1140
張先得 1978「北京豐台区出土戰國銅器」『文物』1978-3: 88-90
朝陽地区博物館・喀左県文化館 1985「遼寧喀左大城子眉眼溝戰国墓」『考古』1985-1: 7-13
程長新 1985「北京市通縣中趙甫出土一組戰國青銅器」『考古』1985-8: 694-700, 720
天津市文化局考古発掘隊 1965「天津東郊張貴庄戰國墓第二次発掘」『考古』1965-2: 96-98
馮秉其 1957「灤縣発現了古文化遺址」『文物参考資料』1957-3: 79
寧夏回族自治区博物館・同心県文管所・中国社会科学院考古研究所寧夏考古組 1987「寧夏同心県倒墩
子漢代匈奴墓地発掘簡報」『考古』1987-1: 33-37
寧夏文物考古研究所・中国社会科学院考古所寧夏考古組・同心県文物管理所 1988「寧夏同心県倒墩子
漢代匈奴墓地」『考古学報』1988-3: 333-356
北京市文物工作隊 1962「北京懷柔城北東周兩漢墓葬」『考古』1962-5: 219-239
北京市文物工作隊 1963a「北京房山縣考古調査簡報」『考古』1963-3: 115-121, 129
北京市文物工作隊 1963b「北京西郊白雲觀遺址」『考古』1963-3: 167-169
北京市文物研究所拒馬河考古隊 1992「北京市竇店古城調査与試掘報告」『考古』1992-8: 705-719
北京市文物研究所 1995『瑠璃河西周燕国墓地 1973-1977』文物出版社
遼寧省博物館 1985「遼寧凌源県三官甸青銅短劍墓」『考古』1985-2: 125-130
廊坊地区文物管理所・三河県文化館 1987「河北三河大唐廻, 双村戰国墓」『考古』1987-4: 318-322
甌燕 1988「試論燕下都城址的年代」『考古』1988-7: 645-649
王巍 1997「中国古代鉄器及冶鉄術對朝鮮半島的伝播」『考古学報』1997-3
王巍 1999『日本研究博士叢書 東亜地区古代鉄器及冶鉄術の伝播と交流』中国社会科学出版社
賀勇 1989「試論燕国墓葬陶器分期」『考古』1989-7: 635, 642-648
許宏 1999「燕下都營建過程の考古学考察」『考古』1999-4: 60-64
高明 1981「中原地区東周時代青銅礼器研究(上), (中), (下)」『考古与文物』1981-2: 68-82, 1981-3
: 84-103, 1981-4: 82-91
石永士 1996「初論燕下都大中型墓葬的分期—兼談人頭骨叢葬的年代及其性質」『遼海文物学刊』1996-2
: 23-44
石永士・石磊 1996『燕下都東周貨幣聚珍』河北省文物研究所編 文物出版社
石永士 1998「姬燕国号的由来及其都城的変遷」河北省文物研究所 編『河北省考古文集』東方出版社
: 408-421
陳光 1997, 1998「東周燕文化分期論」『北京文博』1997-4: 5-17, 『北京文博』1998-1: 18-31, 『北京
文博』1998-2: 19-28
張辛 1994「侯馬附近地区的東周陶器墓」山西省考古研究所 編『三晋考古』第一輯 山西省人民出版
社: 30-54
白寿彝 編 1994『中国通史 第四卷 上古時代 上冊』上海人民出版社
白寿彝 編 1994『中国通史 第四卷 上古時代 下冊』上海人民出版社
馮勝君 1998「燕国陶文綜述」『北京文博』: 29-32
愈偉超 1985「周代用鼎制度研究」『先秦兩漢考古学論集』文物出版社: 62-112
葉小燕 1985「中原地区戰国墓初探」『考古』1985-2: 161-172
尹武炳 1987『韓国青銅器文化研究』芸耕産業社

戦国期における燕の墓葬について

- 秋山 進午 1968, 1969 「中国東北地方における初期金属文化の様相（上），（中），（下）」『考古学雑誌』53巻4号，54巻1号，54巻4号
- 秋山 進午 1982 「中国における王陵の成立と都城」小林行雄博士古稀記念論文集刊行委員会 編『考古学論考』平凡社：903-929
- 飯島 武次 1980 「東周時代周室と秦の副葬陶器」『三上次男博士喜寿記念論文集 考古編』平凡社：43-75
- 飯島 武次 1998 『中国周文化考古学研究』同成社
- 梅原 末治 1944 『増訂 洛陽金村古墓聚英』
- 岡村 秀典 1985 「秦文化の編年」『古史春秋』第2號：53-74
- 潮見 浩 1982 『東アジアの初期鉄器文化』吉川弘文館
- 志賀 和子 1996 「洛陽金村出土銀器とその刻銘をめぐって」『日本中国考古学会会報』第六号：40-68
- 斬楓毅 1983 岡内 三眞訖 「中国東北地区の曲刃青銅短剣を含む文化遺存を論ず」『古文化談叢』第12集：1-62
- 中朝合同考古学発掘隊 1965 東北アジア考古学研究会誌 『岡上・楼上 1963-1965 中国東北地方遺跡発掘報告』六興出版
- 鶴間 和幸編 1998 『岩波講座 世界歴史 3 中華の形成と東方世界—2世紀』岩波書店
- 林 巳奈夫 1980 「『周禮』の六尊六彝と考古學遺物」『東方學報』京都 第52冊：1-62
- 林 巳奈夫 1989 『春秋戦國時代青銅器の研究一般周青銅器綜覽 三一』吉川弘文館
- 町田 章 1963 「古代中国における下級墓葬について—土洞墓を中心とする考察—（一），（二）」『史泉』第26号：54-67, 『史泉』第27・28合併号：53-66
- 町田 章 1981 「殷周と孤竹国」『立命館文学』430, 431, 432
- 宮井 善朗 1996 「中国韓国調査旅行」『福岡からアジアへ 4 弥生文化の二つの道』「文明のクロスロード・ふくおか」地域文化実行委員会編 西日本新聞社
- 宮本 一夫 1991 「戦国時代燕国副葬陶器考」『愛媛大学人文学会創立15周年記念論集』愛媛大学人文学会：179-195
- 宮本 一夫 1992 「戦国時代三晋地域の副葬陶器の編年」『出土文物による中国古代社会の地域的研究』（平成2・3年度科学技術研究費補助金一般研究（B）研究成果報告書：研究代表者 牧野修二）：7-23
- 宮本 一夫 2000 「戦国燕とその拡大」『中国古代北疆史の考古学的研究』中国書店：205-235
- 村上 恭通 1998 『倭人と鉄の考古学』青木書店

石川岳彦

<図版出典>

- 図2 (河北省文物研究所1996) より改変
- 図3 (河北省文物研究所1996, 河北省文化局文物工作隊 1965b) より改変
- 図4 (河北省文物研究所1996) より改変
- 図5 (河北省文物研究所1996, 河北省文化局文物工作隊 1965b, 河北省文化局文物工作隊 1965c, 北京市文物工作隊 1962) より改変
- 図6 それぞれの墓葬について表1の参考文献から作成
- 図7 (河北省文物研究所1996, 河北省文化局文物工作隊 1965b) より改変
- 図8 (河北省文物研究所1996) より改変
- 図9 (河北省文化局文物工作隊 1965c, 北京市文物工作隊 1962) より改変
- 図16 (河北省文物研究所1995) より改変
- 図17 (河北省文物研究所1995) より改変
- 図18 (河北省文物研究所1995) より改変
- 図19 (河北省文物研究所1987b) より改変